312.25
cB74b

0005395000

0005395-000

３１２．２５－ｃＢ７４ｂ

ボースは叫ぶ

ボース・著

盛運堂

１９４４

ABC

30 ニ1A-69
3/10
(3)
312.25
cB74e

ボースは叫ぶ

ボース・ラスビハリ著

ボース・ラスビハリー著

ボースは叫ぶ

盛運堂刊

312.25
CB74a

國會圖書館
41.6.10
納本書

696736

自序

皇軍は印度國民軍と相携へてインパールへ進攻されてゐるが、私には印度獨立の黎明が近づいて來てゐるやうに感ぜらる。

而して印度が完全に英國から離脱するならば、今次の世界大戰が結末を告げると極言したい。少くとも英國が完全に降伏すると信ずるものである。

印度の獨立はそれだけになか〳〵容易なことではない。それにしても東條總理大臣閣下の聲明に基く日本の絶大なる支援によつて　皇威が印度に光被し、印度國民軍が活躍勇戰してゐるから、獨立することには間違ひないのである。

私は過去三十年、殊に印度獨立聯盟總裁兼印度國民軍最高司令官在職中或は放送、或は新聞雜誌著書等によつて日本の方々にもよく印度問題を說明し、且つ祖國印度へも屢々警告しておいたのであるが、印度問題は實に世界的重大問題であるから、更に

構想を練り筆硯を新たにして一本にまとめて發行することにしたのである。

本書の刊行に丁り、井川定慶氏に負ふところの大なるを併せ記して、聊か謝意を表したい。

皇紀二千六百四年
天長節　於帝都

自由印度假政府
最高顧問　ボース・ラスビハリ

目次

一、我等の自由と日本……一頁
　印度人の誓――印度獨立宣言――自由を目指し印度人は起つ
二、豐饒中の貧困……三四頁
　不思議な飢饉――悲慘なる農民――米英の戰費を賄ふ印度――威嚇と約束――文化的壓迫――正義は力なり――パンが彈丸か
三、英に最後の判決下る……九三頁
　東洋の牙城崩る――儼たり！　日本
四、ガンヂー翁の抗英……一〇四頁
　斷食は神への訴へ――奇蹟的勝利――仇敵は苦惱す

五、東亞全印度人大會と反響……一三頁
歷史的の日——試錬と艱苦——有力なる同盟——神與の機會——祖國印度のために——唯一無二の機會——一致協力する日本人の姿——東京より出席の意義——幸福なる一時——生涯の使命——ビルマの獨立——全印度人の義務
六、蔣介石に與ふ……一六三頁
七、祖國の愛國者に告ぐ……一六七頁
英國の奸手——狡猾なる宣傳——日本の保證——意外なる話——警告の言葉——犧牲の覺悟——戰は印度國內のみに非ず——日本の優秀性——賢明なる判斷

一、我等の自由と日本

印度人の誓

吾は此處に嚴かに誓ふ　來る可き艱難の如何に大なりと雖も
吾は寸刻、晝夜も憩はじ
自由旗の我等の母國をおふて飜る日迄
自由旗の我等の手に依り打立てられる日迄

吾は此處に嚴かに誓ふ　來るべき艱難の如何に怖るべきものと雖も
吾は自らを喜びて犧牲に供せむ
吾が愛する母國に報ぜむは今

吾が力もて母國の難を排除せむ

吾は此處に嚴かに誓ふ　來るべき艱難の如何に大なりと雖も
吾は仇敵撃滅に協力せむ
不幸なる枷に泣く母國を自由にせむ
暴英桎梏の絆を斷乎絶たむ

吾は此處に嚴かに誓ふ　來るべき艱難の如何に怖るべきものと雖も
吾は喜びて召に應ぜむ、顧みはせじ
吾が此の手もて敵を究追せむ
海を越え彼が本土に迫る迄

吾は此處に嚴かに誓ふ　來る可き艱難の如何に大なりと雖も

我が子、我が妻、持てる一切を棄て
我が一切を擧げ誓を果さむ
我が愛する母國のために、我は國子なれば

印度獨立宣言

過去十三ヶ年間、全世界各地に在住せる印度國民主義者は年々一月二十六日を期して此の宣言を朗讀し、印度最後爭鬪への決意を新たにせるものである。

我等の獨立鬪爭の此の期間、幾多盛衰あり、實行運動方法に就きても數多世狀に應じ變化し來つたのである。

然し乍ら、その目的は常に不變終始一貫せり、――即ち印度完全獨立――而して印度は今やその目的に漸次接近しつゝあるのである。

宣　言

我等は、一般國民が自由を有し、その勞作の成果を愉しみ、國民發展の機會を構成す

る日常生活の滿足を有する如く印度國民斯くあるべきは、當然天賦の權利なりと信ず。

我等はまた、外國政府にして此等の權利を剝奪し國民を抑壓せんとする時、其の國民は更にその制度を改革、或は廢止するの權利を有するものなりと信ず。

印度に於ける英國政府は印度國民より自由を剝奪せるのみならず、印度民衆をして利用開發の資として基礎を築き、印度をして經濟的、政治的、文化的、且つ精神的に荒頽せしめたり。

斯るが故に、我々は、印度は一切の英國關係を絶ち、完全獨立を獲得せざる可らずと信ず。

印度は經濟的に全く荒頽せしめられたり。一般民衆の稅金は我等の收入に比し天地の不均衡なり。

我等の一日平均收入額は七パイス（五セントより少額）なり、而して我等の支拂ふべき重稅は、農民に課せられたる土地歳入二割、最低生活者に課せられたる最重鹽稅三分也。

手紡の如き村落家庭工業は一切破壞せられ、農民は一年最少四ヶ月間無爲徒食の餘儀なきに至り、その手業技能は痴鈍ならしめられ、諸外國民と異り、代行すべきもの禁ぜられ小工業は斯くの如く破壞せられたるものなり。

關稅、通貨に於ては農民に益々荷重負擔を來す專斷横暴なる抑制を加へをり、英國は印度輸入全面を覆ふべき巨大なる物品を製造しをれり。而して其の關稅に於て明らかに英國製品に對し一方的偏重課稅をなし、民衆に對し益々負擔重き課稅より生ずる歳入により奢侈に過ぐる行政を支持する狀態なり。

更に甚だしき專横は爲替交換比率は加へられ爲に年々印度より英國へ流出する金額は數百萬を算するに至れり。

政治的に印度國狀の英國統治以下に成下りたる例未だ曾てなし。國民に對し如何な

る改良も眞の政治的力として現はれたる例なし。

言論の自由發表、自由集會の權利は一切我等に附與せられず、而して數多同胞は國外に逃れ住むの餘儀なきに至らしめられ、生きて再び祖國に歸來し得ず。

總ての有能行政家は殺害せられ、民衆は輕輩官吏、書記の爲す儘に滿足せざるを得ぬ狀態なり。

文化的に、傳統古き印度敎育組織は滅裂に破壞され、訓練は行ふ者をして自らを縛するに役立つのみなり。

精神的には如何、强制的非武裝は我等をして去勢狀態に陷らしめられ、而して外國軍隊蠻居駐屯し一切の精神的反抗を破摧すべく殘忍非道なる行爲も敢えてなし、我等をして我等自らを處置しえず且つ外國壓制に對する防禦をなし得ざる如く思考せしめるに至り、加之我等の家、家族をして野盜掠奪、暴漢のなすがまゝに放置せざるを得

ぬ如く思考せしめるに立ち到れり。

我等は我等祖國に此の四重苦を與へたる支配に最早斷じて服從し得ず、是を以て人類並びに神に對する最惡なる罪惡と認む。

然し乍ら我等の自由を獲得する最も有効なる方法は暴力に依つてするに非らざることを認む。斯るが故に我等は我等の出來うる限り英國政府關係一切の組織より退身の用意をなし、租稅不拂を含む一切の英國法に不服從の用意をなす。

若し我等が如何なる憤激、挑戰に遭遇するも、暴力を行使することなく唯一切の自發的英國援助を廢し、租稅納入を停止せば、此の殘忍なる支配の終熄せむこと確實なりと確信す。

故に我等は是に依り、爾今、完全自治國體建設目的のために時々發せられる會議派指令を運行せむことを此處に嚴かに誓ふ次第なり。

バンデー　マータラム

自由を目指し印度人は起つ

毎年一月二十六日の印度獨立宣言記念日祝典は亞細亞に於けると同樣、印度に於ても非常なる成功を收めつゝあることに些かの疑もないのである。

我等の愛國者達は印度各地に於いて英國砲火に勇敢に抗しつゝこの大記念日を祝したであらう。斯くする間亞細亞に於ける印度殖民地は如何なる場所に於ても何等かの形式に依りこの日を祝賀せざる處は唯だの一個處もなかつたのである。

此の事實を知るに及び印度獨立聯盟組織が全亞細亞を通じ完成の一段階に到達し、在住印度人の疑ひなき而も無限の援助を受けつゝあると確信を以て云へるのである。

印度の敵に依り撒布せしめられたる報道に反し東亞在住印度人は誠に愛國的であり、我等の自由獲得爭鬪に協力しつゝあるのである。

かつて此等の人々は僅か數名の特別例外者を除き有力なる英帝國主義擁護者と思考

されてゐたのであつた。

彼等は印度自由獲得運動に何等の支援もなさなかつたのである。而も彼等は印度國民日に當り彼等の國旗すらも掲揚しなかつたのである。然し、彼等英國戰備基金を寄附し、口々に英國支配の宏大さ、光榮をさへ稱揚してゐたのである。

是は一に、英國が世界に向つて此等地域に於ける印度人は英國印度支配に充分なる滿足を得てゐる、或は又英國海外司政の溫手を受けつゝあると虛僞宣傳をなせる結果である。

然し乍ら此等一切の事實は、英國支配より解放せられたる最近一年以內に、全く作り事なることが證明されたのである。

疑ひもなく熱誠を以て最も自然に國民自覺記念日を祝賀したことは、一切が心からなる自然の愛國的感情からなる正眞正明眞摯なる表現たる事實は、以て智識階級者に充分なる印象を與へたことであらう。

或者は斯く問ふであらう、「何故彼等は一年前に此の感情を表はさなかつたのであ

らうか」と。

その答は明瞭である。「此の地域には萬有力にして、暴君なる英國が專在してゐたからである」

今日も存在してをるに違ひないのであるが、英帝國主義の犬として喜々として使役せられ些かの屈辱も感ぜぬ程墮落、低級化したる數名の印度人が居るけれども、此等は誠に稀有の特例と見なければならぬ。

一般印度人の愛國感情は夥しく制壓されてをつたのである、種々なる理由にも基因することなれど此等地域に於ける印度人は敢えて英國官公吏の怒を蒙らざるやうにしたのである。

例へば、泰國の如き自由國に於いてすら、當時英國公使は鐵面皮にも印度人商人を一括召集し、彼が頭をもたげむと試みたりとか、尊大なり、或は會合に出席したり、或は文化發展の爲め新たに組織せられたる會に基金を提供せり等々凡ゆる問題に難癖を附し嚇し或は恐喝する等々横暴なる行爲を敢えて行使してゐたのである。

これは單にバンコック在の無辜の印度商人を威嚇せんとするにありて、彼等が過れりと思考せるに非ず、彼等は英國暴吏は說明を容れず彼等の爲せる事の如何を不問犧牲に供さるゝことを知つてをつたからである。

彼等は祖國を愛して居たのである、然し乍ら斯る災禍を恐るゝの餘り敢えて當面することを回避したのである。且つ印度問題に關し彼等自らの利益を犧牲に供する迄に用意がなかつたのである。

また彼等は彼等の獨立擁護の經驗も無く、又協力すべき訓練を經てゐないのである。

然し乍ら、英帝國主義が、災禍の此等地域より消滅するや否や、此等地域の印度人は彼等自身の自由なるに氣付き、自由人として彼等の父祖の持てる勇氣を發見した。而して彼等の體內に潛んでをつた處のその勇氣ほ勃然として表面に現はれはじめたのである。

彼等は勇躍國民運動に參加した。

印度獨立聯盟の組織されて以來、全亞細亞各地印度人よりの代表任命、一九四二年六月十五日バンコックに於いて歴史的獨立會議が開催され、印度自由のため國外よりの爭鬪結成の決定されてこの方、英國宣傳家連は世界に向つて、亞細亞に向つて、亞細亞に於ける印度人は此の運動を支援せず、或は日本人の傀儡として働く過れる印度人の手に操られる狂言に過ぎぬ等々の虚構宣傳に狂氣大童なのである。

この手法こそ常に英國が强力なる反對に遭遇せる時に用ふる常套手段なのである。

我々が斷じて忘却してならぬことは、ウインストン・チャーチルは一方に印度は福祉多き英國支配を尊敬し且つ又欣びて英國を支援してゐると聲明しつゝ、一方に於ては會議派を以て過れる煽動者の團體なりと公然記述することを些かも躊躇しないことである。

然し乍ら非常なる熱誠を以て一切は明らかにされ、獨立宣言記念祝賀式を機會に亞細亞在住全印度人の全面的支援に依り英國主張の虚言そのものなることを明白に立證した。

東亞在住印度人は印度自由爭鬪のために最も積極的に、決定的決意を以て起上つた。彼等は彼等の國家を愛するのみならず又祖國の自由の姿を見んと願つてゐる。彼等は自由國の商人として今後、今日ある以上遙か多くの利益を得ることを充分に實現せんと希つてゐるのである。

彼等屬國民たるの理由より日常生活はもとより、その商業經營上多大の不便宜を經驗した。

印度國外に居る商人達は、英國商人達が彼等の政府の直接、間接の援助により如何に莫大なる利得をせしめて居つたかをはつきり見せつけられて來た。又印度商人連は、如何に聰明であり、又多大の勞を費ひやすも、此等英國掠奪者流の時折投げ出す殘屑に滿足せねばならなかつたのである。

彼等は印度が自由とならば、彼等の國家より一切可能なる援助を得られ、世界に於ける外國貿易先馳者として彼等の失へる威信を確立出來ることをよく知つてゐる。

彼等は、彼等が例へ如何に富裕であり且つ有能の士であつても、彼等が他國支配下にある間は印度國内に於けると同樣、國外に於いても、支配國に對する細心の注意を拂ふことなくしては實行し得ず、又人々の尊敬を受けることの出來ぬこともよく知つてゐる。

商業程利益を得るに非ざる他の職業に從事せる印度人に於いてさへ、此等諸國在英國當局に如何に屈辱せしめられてをつたか、又彼等の居住し勞作する土地住民さへも、斯る理由より當然拂はるべき尊敬すら受け得なかつた事實をよく認めてをる處である。

彼等は、彼等の愛し崇敬する祖國の利益に對して英國帝國主義者に依つて如何に不利を强ひられてをつたかを、彼等は自覺してゐる。

英國は印度に反する逆宣傳を撒布し、殊に印度自由宣言に對し、印度人は自治するに適せずとして、此等地域に於ける我等の不幸なる落伍者並びに墮落せる同胞を好例として暴露し世界に宣傳を續けてをるのである。而して彼等は此の事實を最も卑怯なる方法であり、且つ全くの虛僞なることを承知しつゝも如何ともなし得なかつた。

此等の事實を明白に知り、印度並びに亞細亞に於ける英國帝國主義完全破壞のため、亞細亞に於ける我等の愛國同胞達が、欣然我等に參加協力するは誠に自然のことである。今日彼等は此の重大問題に對し大團結し、大努力すべく起上つたのである、而して彼等が最後迄共に進むことに就いては既に疑を容れぬ處である。

彼等が印度獨立宣言記念日を心より祝賀し、印度が完全に自由獨立する日迄この鬪爭を飽く迄繼續する決意を再び鞏固にする所以は一つに此の精神より出でたるものに外ならぬのである。

印度は今日、全世界に居る印度人が悉く凝視期待してをる印度獨立日の完全獨立の鬪に立つてゐる。印度數千萬の民衆は英國暴政完全殲滅、印度完全獨立獲得に彼等の一切を犧牲に供する嚴肅なる誓を立てゝゐる。數十萬印度の子女達は、母國解放の嚴

肅なる誓言を實證すべく、凡ゆる持てる一切のもの、將た貴き生命をも犧牲に供したのである。

而して更に多數の者が全印度を通じ、斯くする現在一瞬時に於ても、印度完全獨立のため殉じたる幾多の愛國者の尊き垂範に競ひ倣はんとしつゝあり。彼等殉國の神聖なる記憶は未來永劫印度數千萬民衆の心に深く〳〵刻み付けられてをるであらう。

今日、全世界の印度人が印度獨立記念日に全精神を凝結させてをる如く、英國帝國主義に對する印度の斷乎たる闘爭は、今や其の頂點に達してをるのである。抗英戰最後の戰が行はれつゝあるのである。而して既にして英國は背水の陣を布き苦闘してゐる。印度に於ける英國當局勢力は崩潰し、彼等の印度に於ける戰爭努力も遂に痲痺狀態に陷り、彼等の賴りとする抑壓基地も支離滅裂となつた。印度に於ける彼等英國最後の日は速かに彼等に近づきつゝあり、而して今や如何なる力を以てするも印度に於ける英國の運命は回避不可能となつたのである。

斯く我々が今日銘する印度獨立記念日は、印度の自由爭闘史中特有のものである。

印度國民のみによらず英國と戰ふは、今回を以て嚆矢とし、而して又印度の敵英國が、亞細亞に於けるアングロ、アメリカ帝國主義殲滅の聖戰の日本の强力なる聖手に、强か打のめされたることも、今回を以て嚆矢とするのである。强力なる日本國民は亞細亞解放の聖業に於いて、その共同の敵なる英國擊滅に就き印度に對し全面的援助せむと誓つたのである。斯くして無敵日本軍は印度に於けるアングロ、アメリカ牙城潰滅に斷乎着手したのである。

今日、抗英戰に於ける印度の勝利は既に確實である。更に有利なることには印度國民は有力なる日本國民の斷乎たる支援の手を有してゐるのである。印度全土に涉る革命、印度國境外にある有力勇猛なる日本軍、斯く兩所に上る猛火は極く近き將來に英國勢力を全印度地域より一掃するであらう。

斯く完全獨立に對する印度の勝利の確信を堅持し、祖國內外にある印度人は今日の此の獨立記念日に大なる期待を掛け注視しつゝある。此の斷乎たる信念を以て、印度の果敢なる闘爭最後の勝利は今や目睫の間にあり、印度獨立日を記念する各地の記念

祭はいづれも此の信念を以て殊に今日を意義づけてゐるのである。

英國の桎梏より母國を完全獨立せしめんとする聖業のため祖國數千萬の兄弟、姉妹達は無限の苦惱と犧牲を拂ひつゝあるが、我等東亞在住の全印度人は祖國內同胞の英雄的努力に對して全幅の協力、援助すべく我等の職分を果さねばならない。我等の尊敬する指導者達 マハトマ・ガンヂー、マウラナ・アーザッド、パンディット・ネールー、カーン・アブドゥール、ガッファル・カーン、その他數千の愛國者達は惜しむらくは英國の捕ふる處となり監禁されてゐる。斯く多數の有能なる指導者を拉致されたる大衆は、その傷手にも屈せず英國に對し猛烈なる抗爭を續けてゐるのであるが、一面我等東亞在住全印度人は我等母國の自由獲得聖戰に、敢然我等自らを投ずるの日も決して遠くはないと信ずる。

祖國に於ける同胞諸君に對しては、祖國完全獨立のため極惡、殘忍なる英國暴壓に、斯くする一瞬間にも直面せる同胞諸君に對し、その犧牲的、英雄的行爲に余は心より頭を垂れ、感謝を捧ぐる次第であるが、今日余は彼等に確信を以て保證せむとすることは、全能なる神は印度が自由たるべく意志し給ふてをるのである、而して印度は必ずや自由になるであらう。諸君の勝利の日は速かに迫りつゝある。印度解放の日は眼前にあるのである。

バンデー　マータラム

千九百三十年一月二十六日は印度自由獲得戰の最も有意義なる里程標である。此の日に印度人は公然と完全、絕對自由の旗を高揚した。最早英國と何等の會談無用となつたのである。最早英國を斷然惡鬼として斷ずるに躊躇の要はなくなつたのである。この日英國一切に對する袂別を宣したのである。今日迄英國に妥協の意志なくも餘儀なく彼等に迎合せざるを得ざりし個人或は團體もあつたのであるが、この歷史的日以來、印度全土は擧つて公然抗英戰に參加した。勿論事態改良等の如き妥協的態度に非

ずして斷乎全面的に英國勢力全滅、排除の決意に從つたのである。印度國民會議派の其後の活動は、この決意を愈々鞏固ならしめた。

千九百三十年一月二十六日のこの記念すべき日に我等印度人は凡ゆる町に、凡ゆる村に集合し、全世界に向つて英國の印度支配が精神的に、文化的に、經濟的に又政治的に如何に殘忍苛酷に印度を粉碎せるかを宣明したのである。英國の印度支配は人類將た又神に對する最も憎嫌すべき罪惡である。故に英國の支配を根絶せしめることは全印度人の權利であり且つ義務である。我等數百萬の同胞はこの日相會し、神と自由の旗の前に嚴肅に誓つたのである。

年々歳々この誓は增强され、決意は新たにされたが、英國は斯る明らかなる示意を抑壓すべくその最全の努力を盡したのである。然しその彈壓の烈しさの加はる毎に、我等印度人の決意は愈々益々鞏固活潑になつて來た。英國の殘逆なる武器に敢然抗しつゝ我等同胞數百萬は今日を期して相會し、切齒扼腕決意を新たにするであらう。この事實を防止せんと暴壓者英國は全印度を通じ必ずや殘虐の限りをつくすであらう。

この事を思へば同胞の安否誠に戰慄を覺えるのである。彼等の殘虐非道の狼藉は火を見るより明らかである。唯道義決意以外の武器なき數百萬印度人は、彈丸、馬蹄、鞭、凌辱、監禁等々凡ゆる暴力に直面するであらう。然し印度人は決して躊躇逡巡せぬであらう。彼英國の飽くなき暴逆を思ふ時我等は戰慄を禁じ得ぬのであるが、我等の兄弟、姉妹達が殘忍なる死と破壞に斷乎抗しつゝ敢然起つ姿を想ひ見る時、我等の誇りと復讐の熱血は我等の血脈を奔流し、波打つのを覺える。

東亞在住の我が同胞諸君、今年こそ、我等祖國の同胞達が斯く多大に苦惱、艱苦せる誓を實現する最初の機會を持つのである。諸君はその誓を何等障害を受くることなく立てることが出來るであらう。諸君は凡ゆる町に、凡ゆる村に擧つて相會し、印度國旗の下に我等共同の敵に對し國內同志に參加する固き決意を表示せられんことを余は衷心より同胞諸君に愬ふる次第である。

さて今日をして我等の成したる一切の反省の日となし、且つ又成すべくして未だ成さゞることを思ひ出すべき日と定めやうではないか。苟も印度人たる者一人たりと雖

も自由獲得を意にせざる者をなからしめよ、又一人たりとも祖國のため義務遂行の決意なきものを一掃せしめよ。今日より我等一切を超越し、階級差異を徹し一致團結印度獨立聯盟旗の下に立女うではないか。我等の貴重なる時間を徒らなる議論に空費せぬ樣心掛けようではないか。我等の義務遂行の妨げとなる考を棄てようではないか。

諸君、自由と光榮を目指して共に進まうではないか。

バンデー　マータラム

皇紀二千六百三年一月二十六日印度獨立宣言記念日に際し、印度國內印度人並びに友邦諸國在住の印度人に向つて放送す。

同胞諸君、今日は我々印度人にとつて最も嚴肅なる日であります。顧れば十三年前、諸君は我等印度の政治的、經濟的、文化的、精神的一切のものを粉碎したる英國暴枷より母國を解放せむと嚴かなる誓ひを立てたのであります。我等は印度に於ける一切の外國支配を人類並びに神に對する最大罪惡として宣明したのであります。我等は暴政に抗爭することを以て我等の特權、義務と斷じ、印度は此の重壓に對し敢然と英雄的抗戰を開始したのであります。外國の地に居り今の狀勢を凝視した自分は甚だ心を痛め且つ誇を感じたのであります。暴力に長けたる英國帝國凡ゆる暴力、老獪なる手段を盡し印度國民主義運動を鋭意粉碎せんとしつゝある有樣を看取し甚だしく私は心を痛めたのでありますが、然し私は我が同胞の斯る暴力に些かも屈せず、狡智に惑はるゝなきを知り大いなる誇を感じたのであります。印度國民會議派指導下、彼等は絶對、完全獨立を目指し純一完全統一された國民主義の正しく純粹なる道を選んだのである。十三年以前の今日、我が同胞は諸君の希望することを正しく開陳し、斷乎たる誓を立て、英國暴政を詰問し敢然武力抗爭に起ち、その後の活動に依り彼等の誓が單なる言葉のみでない事を明らかにしたのであります。數千の同胞は牢獄へ引かれ、又數千の兄弟は生命を財產所有物を奪はれました。又多くの者は筆舌を以て表現し得ぬ屈辱、蠻行を被つたのであります。かくて年々歲々、同胞は兇惡なる血火を潛

る毎に、愈々決意を鞏固にし、年經るに從ひ、諸君は銃劍砲火、馬蹄、牢獄を無視し、愈決意を固め誓を新たにして來たのであります。諸君は兇惡なる英國を殆ど無能ならしめました。世界は諸君の行爲を賞讃し、諸君の運命に絶大なる同情を寄せてゐるのであります。

今日、再び諸君は凡ゆる町村の公園に、道路に於て同じ誓ひを新たにしたに違ひないと確信致すのでありますが、諸君今日の精神、決意を粉碎、檢束すべく英國が如何なる兇暴なる手段を行使するや思ふだに誠に戰慄の種であります。然し自分は、我が同胞が如何なる武力にも絶對屈服せぬことを確信致します。諸君は當然の權利の爲め公然堂々起上り抗戰してをるのであります。世界如何なる國民にしてこの諸君の權利を抑へ控へ得るものがあるでありませうか。

我が同胞諸君、故に諸君は唯戰ふのみでよいのである。諸君は正義の力を有してゐるのである。諸君は今日世界の重大なる役割を持つてゐるのであります。世界は諸君の鬪爭を注視し、且つ又機會を逸せざることを期待してゐるのである。我等の愛する母國ヒンドゥスタンの名譽を毀損せしむること勿れ。若し諸君が勇敢に戰ふなら、世界は諸君を賞讃するであらう。世界は喜んで諸君を援助するであらう。今日諸君は印度のみならず世界の平和と幸福を決する位置に立つてゐるのであります。數百萬の人々の未來の幸福は一つに懸つて諸君の爭鬪の結果にあります。諸君は必らず勝つ、全世界に波及せる自由の力は必らず成功を修めるでありませう。若し諸君失敗せむか、世界の躍進勢力一切の希望は永久に失はれるのである。故に諸君、唯だあるは爭鬪のみであります。

我々の友交國民に、自分のこの愬へは、英國宣傳の結果作られたる印度よりして歪曲排除されるでありませう。英國は印度支配の暴壓を正義化せんと英國追從の國民擴大に努力を盡して來たのであります。印度は各國に對し、迷信と偏見横行の未開、野蠻國として紹介されて來てゐるのであります。智識、敎養、藝術、科學の中心であつた印度に對し、呪罵でなくて何でありませう。成程、英國は我等の光輝ある母國を支離滅裂、相互扶助なき國となさむと多大の苦虜を重ねたのであります。然し乍ら彼等

は今日國民會議派指導下にある印度國民の精神を破壞することには失敗したのであります。印度は今日決して、古代にいや增し決して弱體國ではないのであります。武力こそ充分ではないが、行はんとする決意、襲ひ掛る敵の如何なる兇暴なる武力に對しても敢然鬪ひ死する決意に於いては如何なる點よりするも絕對ひけめをとらぬのであります。

外國の友人諸君、印度を信じて頂き度い。曾て世界を指導した印度は今や再び起ち上つたのであります。同情と理解を以て印度の爭鬪を支援していたゞき度いのであります。印度の成功は一つに全世界に於ける印度に好意を寄せられる方々の全希望、意氣に懸つてゐるのであります。

再び自分は印度同胞諸君に愬へよう。ガンヂー翁は既に英國に對して戰を宣してゐます。今こそ諸君は起ち上り、翁を推進し、最後の戰に立つ時であります。

全智全能の神を信じ、諸君自身を信じ、而して印度獨立を信ぜられよ。然らば成功は必らず諸君のものである。記憶せよ諸君、貴き殉國者の血潮は自由の基礎の上に流されたのである。

バンデー　マータラム

日本紀元二千六百三年一月二十六日、カセイ劇場に開催せられたる印度獨立宣言記念日特別大會に於て行へる演說

閣下並びに日本陸海軍將士各位。昭南各種團體代表者諸氏、同胞諸君！

今夕此處に閣下並びに各位諸氏を御迎へし得ましたことは不肖私にとりまして此の上なく欣快とする處であります。

今日は印度人にとりましては絕對忘却出來ぬ記念日であります。顧みますれば過ぐる十三年以前、印度國民會議派が印度大衆の總意により印度の完全、絕對獨立の誓言

を立てた最も記念すべき重大なる日であります。武器を持たざる印度人に對してその日に、否此の記念日の來る毎に英國の我等同胞に加へ來つた處の言語同斷誠に筆舌を以て表はし得ぬ兇暴なる彈壓の忘る可らざる記念日であります。印度に於きまして、今日、此の時、數萬の同胞があの誓を新にすべく、英國の殘酷なる銃砲火に曝されたことでありませう。然し幸にも當地に於いては我々は何等の抑壓干渉をも被らず、先刻いとも嚴肅に我等の誓を新たにすることが出來たのであります。私は苦惱せる彼等同胞に同情の涙を禁じえないのであります。然し乍ら印度の不撓不屈の精神を以て英國の暴力に對し果敢なる抗爭を繼續してゐる姿は、全世界に居る我々印度人にとり大いなる誇りと希望の源泉となるのであります。

二世紀に渉る英國の破壞的支配も印度の精神を崩潰することには失敗したのであります。英國商人等が印度の富、名譽の盜人と化したその日より漸次不撓の抗爭を續け來つた不屈の印度精神は破られなかつたのであります。英國宣傳が世界に示した事實に相反し、印度の抗英戰は決して終熄しなかつたのであります。この抗爭には高低の

波あり、戰法にも種々の變化はあつたのでありますが、英國の印度到來以來何等かの形で抗英爭鬪は繼續され唯一ヶ年も無事に過ぎたことはなかつたのであります。

今や全東亞隈なく擴大し、深く根を張つたこの運動は斯くの如く決して新らしいものではありません。英國に對し印度或は印度人が種々繼續的大小の抗爭をして來ましたことは從來一部分乃至一斷片的のものでありましたが、然し今次の爭鬪は非常なる差異があるのであります。

印度人のみで單獨爭鬪をしてをる限り、多くの人々將た他國民の同情ありとしても、印度に對する絕對有効なる助力とはなり得なかつたのであります。然し乍ら、大東亞戰勃發するや、從來日本が印度の自由問題に對し多大に寄せられてをつた處の同情を、確然たる形にする機會が到來いたしました。此同情感は印度鬪爭に全面的援助をなすといふ東條首相閣下の聲明以來直ちに實踐的努力となつて現はれたのであります。而してこれが大動因となり全東亞に斯る强力、鞏固なる運動が斯くも速かに組織されるに至つた所以であります。この事に就きましては私は日本に對し衷心より無限

の感謝を捧ぐる次第であります。

前述致しました如く、東亞に於ける獨立運動は印度國内に於ける運動と分離した別個のものではありません。國内、國外の差こそあれ印度人自身の運動としては印度國内に於ける一運動と絶對同心同體、全く同じものなのであります。強ひて其の差を申上げるなれば、印度國内に於いては非道なる暴壓支配を被むるに反し、當地に於ける運動は凡ゆる一切の激勵と援助を受くることであります。この事實こそ明瞭に認識されねばならぬ根本問題なのであります。

我々は、獨立は人々の眞摯なる努力、貴き犧牲を費して獲得するに非ずんば、成功の可能性なく又價値もないと確信いたします。我々は有効適切なる多大の援助を受くることが出來るでありませうが、その責任は絶對我々自身のものであるのであります。且つまた此の運動は我々自身のものなのであります、例へ强力なるものにせよ弱體なるものにせよ、將た又その目的貫徹の成否如何は一つに我々自身に依つて構成される力そのものに掛つてをるのであります。

私が印度の自由に就き申し述べまするは、單に我が同胞四億の民の政治的解放を意味するのではありません。印度の自由が成功致しましてもその目的は未だ終了してないのであります。勿論、我々は我々のための自由を欲してをるのでありますが、それと同時に人類のための自由を欲して止まないのであります。我々は、印度が世界の運命を形造るに役立つ使命を果たしうる自由を欲するのであります。

佛陀は世界に寄與した印度最後の方ではなかつた筈であります。母國印度は悲慘なる奴隷の枷の下に喘ぎつゝもマハトマ・ガンヂーの如き偉大なる人物を産み出してゐるのであります。自由印度はやがて世界隅々に偉大なる人物の貴重なる使命を送り屆けることが出來るでありませう。印度が闘ふ所以は此の目的のためにあるのであります。且つまた印度が各位の御支援助力を求める所以もまた此の目的のためにあるのであります。

私は各位、日本陸海將士諸顯並びに各種團體の此の運動に與へられましたる多大の

御援助に對し此處に改めて感謝の意を捧ぐる次第であります。各位諸賢の絶大なる不斷の御助力にも不拘、我等の事業は並々ならぬ困難なるものであらうとは今より明瞭に感知してをるのであります。

私は皆様が有史以來の大戰爭の眞中に居ることをよく存じてをり、又この大戰の結果は光輝ある日本の運命のみならず、全亞細亞の運命を支配するものであることもよく存じてをります。私は日本の速かにして決定的勝利を得ることを衷心より念願致してをる次第であります。更に私は日本以外の各國友人に友情、協力の手を延べ眞摯なる友誼を御願ひするものであります。

英國は常に我々を支離滅裂に分割せんと努力し、常に我々をして我々各種團體の利益が同一共同のものでないと感ぜしめる努力を續けて來たのであります。斯る英國の政策の結果として我々の間に生長した處の凡ゆる偏見を我々は一切放擲し、調和と密接なる協力のうちに生活し且つ働くことを切望して止まぬのであます。我々は我々が既に着手した事業の困難なるに鑑み益々各位諸賢の絶大なる御支援と御同情を賜はり度いのであります。

私は我が同胞諸君に重ねて、この運動は我々自身のものであることを强調いたします。我等の友人達は我々が我々の最善の努力を盡す時のみ我々を援助してくれるのであります。我等母國の完全、絶對自由獲得の目的のために、我々印度人が斯くも大多數一大團結をなすに今日迄斯る利便は曾て一度もなかつたことであります。我等はこの絶對好機を逸せず、成就せしめようではありませんか。亞細亞に於ける印度人をして、凡ゆる利便の有するに不拘、窮乏せる母國の呼聲に、不覺にも應じ得ぬてふ誹を受けしめざるやう努力しやうではありませんか。

バンデー　マータラム

二、豐饒中の貧困

★おゝ世界よ、時よ。

おゝ世界よ、時よ。
見捨てられたる我等の祖國はうめく、
恥知らぬ貪慾の重壓に苦しみつゝ
重課を負はせ、我等の不幸の中に
彼は富む。
我等の血、我等の土、人智の中心印度は地下へ、賣られ蹂躙され
印度の名聲は汚されり
斯くして英國は鐵の牙城に。

言葉、言葉にて說きうるなれば——
おゝ世界よ、時よ、聽く耳なきや、
印度の悲しき訴を、溫和なる聲を
肺腑より訴ふる聲に耳を貸す者なきや。
餘儀なき涙を和げ拭ひ得ずや
何たる冷血、利慾漢ぞ。
知らずや物心への僞瞞の數々
策謀、苦心勞苦し支ふる彼
彼等の空洞となりたる巨幹
濡れ腐れ、蝕みたる英木
病菌の浸みたる葉を光の中に吹き落す。
おゝ世界よ時よ、貸す耳なきや。

不思議な飢饉

直接生存そのものを脅す處の力、即ち飢餓、貧困、病魔、饑饉は革命を發生し、人間問題の海嘯を卷き起す處の原動力そのものである。破壞的なる此等の力は革命の萠芽を發生せしむる理想的條件を備へてゐるのである。歷史を繙くに、革命は暴君支配より脫出せんとする最大運動であることは明白なる事實である。故に印度に於ける英國帝國主義に抗してマハトマ・ガンヂーが烽火を上げたる革命は、二世紀の長きに渉つて國民の生血を吸飲し續けたる此等の力に抗する結果を生じたるものである。

印度の社會的、文化的貧血症の最大原因は英國帝國主義と稱せられる政治的寄生虫に因ることはいふまでもない事實で、英國の印度占有以來、不足、缺乏の亡靈は全印度各所に頻々と現はれるに至り、この亡靈出現は遂にその結果として飢饉、病魔、貧困、頑迷な文盲等々を發生せしめた。

元來相互關係を有する貧困、飢饉、病魔は其後漸次蔓延しつゝあるが、若し誰か過

去二百年間の印度歷史を詳細に繙くなら、此の時代の最大部分を占むるものは明瞭に、讀者の眼に頻々誠に不可思議程に發生する飢饉である。從て次の如き質疑の出づることは至極當然のことであらう。「此等の頻々發生する飢饉の直接原因、遠因は如何なる力であるか。一九四二年以來印度大陸全地域に渉つて蔓延せる飢饉は何故斯く恐るべく宏大に擴大したのであるか。」

土地の肥沃、氣象、風土的差異、儉約の習慣、印度農民の勤勉性に鑑み、推論は發生的原因に至ることは避け難きことであり、又現狀により明白にされたる缺陷は必然的に統治組織に在ることは否まれぬ處である。若し誰か此の問題に劃切なる論議を加ふるなら次の結論に到達するであらう。即ち、土地豐饒、食糧の潤澤、年々收穫するところの非常に多種類なる穀物のあるに不拘、各家庭消費に事缺く理由は食糧の國外流出の過大繼續、或は印度民衆が實收より當然の分配高を押收される土地法の缺陷に依るものである、と。

また若し農民が日常生活必須量に相當する勞働の成果を得、而も生活維持の出來ぬ

場合は收用が地租に不均衡であり、且つ英國政廳の土地割當制度の缺陷と云はざるを得まい。またその手段が農民より掠奪するものであり、恐喝、萎縮せしむるためと云ひ得るであらう。農民の日常生計を剝奪する行政組織の皮相的調査に依つてすら、此の問題に有利なる統計學の如何なる手段に依るも、印度飢饉に內在する原因に關する示唆を我々に與ふるであらう。

印度總人口の六分の五は土に依存してゐる。土地の如何は國家の繁榮に重大意義があり、印度の場合は英國政廳繁榮を意味するものであるが——國家の繁榮は食糧、並びに輸出原料の量如何に基礎があるのである。

英國領印度の總面積は六億八千七百萬エーカーである。此の二割二分は總括的耕作不適で、一割三分は英政廳所有の森林である。而して七分は休閑地であり、耕作に使用されてゐる處の土地は二億三千二百萬エーカーで全體の三割五分となつてゐて實際上耕作されてゐる面積は大約二億六千七百萬エーカーで、面積の示す差は一年二回收穫の土地である。土地の二割三分——現在は三分の二に等しい面積が耕作されてゐる——が耕作適地であるが、未だ開墾されざる部分は灌漑費用を惜しむの結果である。然し乍ら、斯る關係で開墾されたる土地も充分なる結果は上げてゐないのである。

米作は一般に十一月より一月にかけ收穫されるので冬期作物とされてゐるのである。米の種撒きは四月より八月迄の間になされるのである。比較的重要視されぬ他の二種類の秋米、夏米と稱するものがあり、米の收穫地は主としてベンガル、マドラス、ビハール、ベラール聯合地方、オリッサ、アッサム、ボムベイ、シンド、ハイデラバッド、マイソール、バロダ、ボーパル、ラムプール州、及び東部州代理地、ボムベイ州である。此等全地域に米作全面積は一九三九年、四十年に於いて七千三百十九萬九千エーカーで一九三八年、三十九年に於いては七千三百三十六萬四千エーカーであつた。全產額は千九百三十八年、三十九年に二千三百九十六萬九千噸に對し二千五百三十六萬四千噸と計算されてゐる。

印度に於いては春の作物である麥は通常十月より十二月迄に播種され、收穫は三月より五月迄の間で、その主產地はパンヂャップ、ベラール、ボンベイ、ビハール、北西シンド、ベンガル、中部印度、グアリオール、ラーヂプタナ、ハイデラバッド、バロダ、マイソールである。千九百三十九年、四十年麥耕作總面積三千四百一萬四千エーカーで前年に比すれば四分減となつてゐる。總產額は一千七十五萬二千噸で一九三八年、三十九年產額より八分增收となつてゐる。發表なきもので他地域に於ける追加產額約二十二萬九千噸程が計上されてゐるのである。

甘蔗栽培總面積は一九三九年、四十年に於いて三百六十二萬三千エーカーでその前年に於いては三百十三萬エーカーとなつてゐる。而して原料糖產額は四百五十九萬噸で前年產額より三割六分の增額である。

尙此の外他地方產額約十八萬八千噸が附加さるべきで、一九三九年以後、急速に驚くべき增產は一に英國政廳が近東同樣印度に軍隊を駐屯せしめ、其の供給上の必要より狂氣的努力を加へた事實に基因するのである。

デリー放送は一九四三年一月十九日、第二世界大戰勃發以來時折行つてゐる如く、「此の增產は英國皇帝の配慮による增產運動の結果である。」と放送した。然し此れは明らかに、「この增產は皇帝並びに駐屯米國軍隊を養ふためのものである。」を意味するものである。

デリー放送局は一九四三年一月廿三日再び放送して、「政廳は麥粉、砂糖、木炭製造從業員に供給するための增產計畫を提出せり。」と述べたが、同三十日又しても次の如き發表を放送した。「國務大臣閣下は、現下の食糧供給問題は明確に戰時特別問題である、而して全世界の平和確保される日迄決定的解決を見ないであらう、凡ゆる國家の船舶は悉く何等かの妨害なくして七つの海を航海することは不可能なのである。戰時中臨時解決法として、少なくともその困難緩和は我々自身の手にあるのである。若し我々自身の努力に依つて此等の難關を解決し得るなれば、皇帝陛下の戰爭努

力に對し直接多大の寄與をなしうるであらう」と。

何人も皇帝の船舶が七つの海を航行するを何を以て保證しうるか、と訝るであらう。

其の答は簡單である、從來東海方面を荒稼ぎして居つた處の皇帝の船舶は既に海底に沒したのである。

デリー放送局は一月二十二日、次の如き放送に依つて誠に面白き秘密を漏らしてゐる。即ち「印度の食糧問題はオーストラリア商業大臣に關係する。聯邦は英國が若し輸送すべき船を提供し得るなら救濟のため即時麥一億ブッシエルを荷役することが出來るのであるが——船さへあるなれば喜んで麥を印度に供給出來るのであるが——インド政廳はその雇用員の食糧要求に會ふに決定した——カラチ新聞に曰く、政廳は特別恩典として、政廳の許可なくして麥を所藏する者に對し任意供出の特赦期間が與へられた」と。

先きに發表された處の增殖增產運動の前の土地、收穫の狀況は如何。

全印度會議派委員政治經濟部發行のパンフレット「會議派政治經濟研究」は以下の如く述べてゐる。

「英國領印度農事統計に依れば、英領印度に於ける實際撒種實面積は二億三千二百萬エーカーである。若し我々が此總耕面積を圓形に總人口を以て區分するなれば三百萬エーカーとなり而して一人頭に對し耕地一エーカー弱の得數が得られるのである。又若し我々が、五千萬噸前後ある英領印度內穀類全產額の實際量を得、全人口に分割するとすれば、輸出、家畜秣、消耗その他許容量を除くと人頭當り慘めにも一ポンド弱しか入手出來ぬことゝなる。然らば何故に農民等は斯の如き土地に執着するのであるか、との質問が起きるであらう。是に代るべき些かの土地も彼等の爲めに開かれてないからである、が答である。烈しい就職難は各都市、僻地にまで蔓延し、賃金勞働者の給與は要求を遙かに超過してゐる。土地に對する重壓の烈しさのため農民家族は若者達を都市へ出稼に出し、彼等は僅かの金額を家へ送金してゐる。此の僅かの金で稅務署へ納稅の補助をしてゐるのである。」

増殖増産運動の結果一九三九年以後食糧の著しき増收にも不拘、印度民衆の今日、飢饉に直面してをるは如何なる理由によるのであるか、とは誠に興味深き問ひである。

主食糧増産も、一人當り耕地の一九三九年後の撒種面積の得數にも不拘、猶要求量より遙か下線にある事實を消滅することが出來ないのである。否寧ろ、印度民衆は不變の飢餓にあるのである。印度數百萬の飢渇したる民衆の不幸を増殖増産運動は如何にして救濟し得るのであらうか。

總人口の八割四分は全面的に土地に依存してをり、農民は六割七分を占めてゐるが、然し此の民衆より取上げたる穀類は支配力を司る徒輩を養ふためになるのである。然し、印度人の惱みを激怒せしむることば、印度人農夫の勞苦に英國政廳自らを肥すのみならず、印度内外にある英米軍を養ふため、哀れなる耕作者に殘されたる最小量をも奪ひ去る事實である。此等の狀況下に於いては飢饉を救濟し得るものは、奇蹟以外には何物もなく、尙ほ此の外に十二分に絞り付ける處の政廳稅務官が居るのである。

或る地方に於ける英政廳に依つて徵收せられる地租の過大なる要求は、全産額の四割乃至五割といふ尨大なものである。斯る重課が農民をして過大なる負債をなさしめるのは當然である。

公式便覽印度社會事業中に、「凡ては農民に不利となつてゐる。農民は耕作者であるから、彼の作物確保のために債財をせねばならない。農民所有の物が少量であり、扶養せねばならぬ者の數がその所有するに比し多過ぎるが故に、未だ收穫し得ぬまゝ家族扶養のために、負債を増加せしめねばならぬのである。債財が増加するに從ひ、返濟は益々困難となる。萬一何事か災難、災害の生ずる場合、返濟は全く不可能となり、農民は、死以外救濟の道なき永久の負債に陷るのである。」

これが英國支配下に生きる三億餘の印度民衆の悲慘なる狀態であり、英國政府の斯る壓制方法が農民をして負債を増加せしむれば、後者は又しても彼の幇助役となるのである。それは如何なる理由か、との問ひが出るであらう。英國は地方負債の主なる

解決法として協同金融運動を推進したからである。

然し乍ら英國帝國主義は、その運動本來の性質たる峻しき論理よりして、結局は農民の負債を救濟するに非らざる此等の方法を採用した。而して是は地方金融業者と競爭的立場に立つことになり、且つ組織的に業者を追放するに過ぎぬ手段なのである。

更に又、今日各所に發生しつゝある如き、貧困なる農民等の緊急必要の生じたる場合、彼等を至極簡單に而も彼等を永久に威嚇、强迫し農民を手離さぬ處の誠に巧妙なる方法なのである。

悲慘なる農民

英國政廳に依つて開業せられたる此等の協同銀行は農民の借財を些かも救濟するものではない。即ち以前に負債せるものは、勿論永久に殘ることになつてゐる。英國政廳は農民が金貸より借用せる前負債は一厘たりとも確實に支拂つてはくれぬのである。

然も、實際に生ずること、而して最も絶望的なる事實は、此の協同金融運動機關の創設以來、地方金融業者に前借用せる金額を物品にても現金にても支拂不可能なる農民は又しても依然たる英國政廳の犧牲に落ちてゐる。農民等が社會的、經濟的地位を確保せむと必死の努力の結果、英國政廳より更に借用し、負債の嵩むその結果は遂には彼等の維持せむとする兩方を失ふに至る。

印度に於ける協同金融史に、此の組織は結局は一般金融業者の債權に代るに組織的に作られたる債權を以てせむと企てたものである、と記述してゐる。畢竟は哀れなる農民は同胞金融業者の手に苦しめられる以上に英國債權者の手に苛酷に苦しめられ惱まされることになる。

英國支配下、現在の經濟的危期の結果を示すと、一般農民世帶平均收支は次の通りである。

一家族一年平均收入	八六ルピー
同　支出	一六九ルピー

不足額　八三ルピー

負債家族の債財　三〇四ルピー

正氣ならぬ者は英國帝國主義は、印度に於ける貧困、負債、惡疫、飢饉には何等關係なしと云ふであらう。

「印度に於ける飢饉は近代利便の發達せるに不拘、發生するは單に偶發的又は地方的災害として發生する理由はないのである。日常不足なる食糧に依つて生活してゐる處の數千萬民衆の一般的の經驗である。」と近代史家は書いてゐる。

頻々發生する他の理由は、印度に於ける英國農事研究機關が、印度に於いて消費される處の穀物、豆類、砂糖の如き必須雜穀に關係なく、輸出用の綿、黄麻、茶、コーヒー等を第一義として取上げてをるからである。

エヌ、ガングリーはその著書「印度に於ける健康と榮養問題」の中で次の如く述べてゐる。「英國政廳に依つて組織されたる農事研究は、主として英國商業を利するため低廉なる原料產物を產出せしめむとする主旨に一貫支配されてゐるものである」と。

旱魃、降雨災害、氣象的原因は疑もなく飢饉誘發に多大なる影響がある、然し乍ら今日の如き農事方法、運輸機關に科學的研究の多大に利用されてをる近代科學時代に於いては、農業組織に何等かの缺陷ありとせねばならぬ、然らば、飢饉の如き避け得らるゝ災害に處する英國政廳の無能と云はざるを得ないのである。然るに英國は人口過剩に歸せしめんとし、屢々我々をして斯く信ぜしめんとせるも、是は當を得ないことで、國民の福利に全く唯損害、惡魔的に相反する利求本意の外國支配者の全面的怠慢、無能に歸因するものである。

オーストラリア、メキシコ及び其他北米南部諸州と地理的、氣象的土壤の相關々係の事實調査は、五十年前迄、此等の諸國は旱魃、洪水、或は灌漑不備等の結果、屢々飢饉に惱まされたのである。然し今日此等の諸國は、世界近代文明國は動水技師達の工夫苦心により、貯水場、灌漑裝置等に依り此の災害救濟に成功してゐる。英國の印度征服以前に漑灌法が印度に知られてなかつたのではないのである。寧ろ反對に、植

物生育促進を目的とする灌漑利用は印度、支那、エヂプトに古代發達した處の古代技術の一つである。

灌漑の起原は東洋にあることは聖書考證に依つても明白な事實である。「而して川はエデンより流れて菜園を潤す」と。

人工灌漑法は古代より印度に於いては用ひられて來た。多數の古代運河、堰、數千の貯水池、井戸があるのである。其の例を引いて見るなれば、マドラス省チンヂレプット地方に千有餘年前に築構されたる二個の貯水槽が現存してゐる。

英國到來以前に利用された大灌漑に就いて見るなら、恐らく最古にして最も有名なるものはカウベリーを横切つてゐるグランド・マンティカットである。この築構は十三世紀迄遡上る。一世紀前加へられたる改良工事以前に於ても、——宏大なるものではなかつたのであるが——六十萬エーカーも灌漑してをり、北部に於いては、西ヂューマ運河は十七世紀にシャー ヂェハーンを潤してゐた。

過去半世紀間に、英國に依つて幾つかの灌漑工事（主として輸出產物耕地に對して）が成されたのであるが、その擴張工事は、資金（英國は其を英國資金と自稱してゐる）の最少限度六分の利率を見、完成十ヶ年以内に回收せられなければならぬてふ狀況に進行は阻害されてゐるのである。

この結果、僅か耕地の五分の一が或種の灌漑に依り保護され、殘る五分の四は季節風の吹くがまゝに放置されてゐる。

英國は彼等の怠慢、罪科を云逃れむとして、印度に於ける貧困、飢饉の根本原因に就いて、次の如く斷言してゐる。「國内人口の增加は驚ろく可く著しく增大した、政廳の見解に依れば、斯く飢饉頻發は全く人口過剩以外に全く原因はないのである」と。何たる愚言であらう。

斯る聲明の愚昧さは單にその僞瞞を曝露し、その罪科を隱蔽せむとする徒勞の企てに過ぎぬのである。

印度の人口に就いては、世界の統計に依れば從來決して異常に增加してはゐない。若し增加したとしても、最も進化したる歐洲各國の人口增加率より明らかに少ないの

である。

印度の貧困、飢饉の實際原因は、東西研究家の說に依れば、全々人口過剩に依るものではなく、灌漑施設の缺乏に依るものである。且つ又重稅に依る債務、地租、前述に於いて我々が既に見聞せる如き壓制的土地分割組織、增大する農地、社會的災禍等より脫し得ぬ農民の無能力による。印度飢饉史に言及する前に、民衆の實際上の社會的、經濟的地位に就き檢討して見ることが重要なことであり、我々の知つてをる飢饉は惡疫流行を誘起する處の榮養不良を想起せしむるのである。疾病は各器官、機能を頽廢せしめ、結局死に至らしめる。他方に於いては、一切の社會的、農事的活動、殊に惡疫流行中に於いては以上一切を剝奪し、飢饉をも含む收穫失敗の原因となり、又飢饉は惡疫、貧困を生ぜしめ、遂には底知れぬ無限の淵に落ちるのである。

全印度會議派政治・經濟部の發表は、飢饉、惡疫流行恐るべき勢を以て進展せる印度民衆の極端に低下せる生理的活力を啓示し、印度文官委員の一人なるダーリング氏は次の如く指適してゐる。「豆類は未だ贅澤である。蕪、玉葱が最も普通なる野菜である。肉類は、祭禮の際か、或は家畜の自然死の前に屠殺するか、又は疾病動物の死亡前に屠殺する以外には殆ど食することはない。衣類は食料と同程度に簡單であり、誠に乏しいもので、男女共に着代へを所持してゐる者は極めて稀なのである。」

ベンガルの地方銀行調査委員はその報告書に、「農耕者の食物は四人食事より一割上等である」と述べてゐるが、或る近代史家の記述に從へば、印度に於ける新生兒の生存平均は、英國幼兒生存年數の半以下である。從て死亡年齡率は一八八一年に於ける三十歲より一九三一年に於いては二六、九歲と低下してゐる。一般死亡率は千人に對し二十四人であり、是に反し英國に於ては千人對十二人の割である。

分娩數千に對する母親死亡率は和蘭に於いて二、四、米國合衆國に於いては八、五であり、印度に於いては二四、五の高率であり、幼兒死亡率は一歲以下乳幼兒死亡率は世界に於いて最も高率で、平常分娩千に對して一六四名、英國に於いては五七名、年々避け得らるゝ疾病のみに依る死者數は五乃至六百萬人である。

此等の怪異的狀態は醫藥診療機關の全般的缺乏よりして誘起せられる。寢臺總數七

萬にして英領印度に於ける病院、施療所數は七千に滿たない。此の重大問題の實際は疾病の廣範圍蔓延、或は醫藥診療の缺乏のみに依るものでなくして、その大部は民衆の生活力體力の頽廢に基因してをり、この根本的原因は食糧の缺乏に依るのである。

率直に事實を示すならば、民衆の三分の二は飢饉狀態にあり、榮養不良の問題は、例へば蛋白質、ヴイタミンの不足、或は偏食等に依る如きものではない、極度の貧困より來る全く單純なる飢餓なのである。

印度醫藥局々長ジョン・メゴウ卿さへ同趣旨の事を書いてゐる。「一般民衆に牛乳をもつと餘計に飲めとか、果實、野菜を澤山食べよ、といふことは、日常食事の分量以外に此等の品が入手出來なければ、云つてきかせるだけ無駄である。既に大多數の人間は、空腹を充たす丈の米もなければ、その他安價な嵩のある食物さへも得られない狀態である。此等の人々に高價な食品を指示することは、食料騷動中の巴里住民を見て、マリー・アントマネット女王が、『何故、彼等は菓子を食べぬのか。』と質ねられたことゝ全く同じ結果になるであらう。」

ベンガル英國政廳保健省は最も怖るべき事實を承認、その報告書中に發表してゐる。その一つは次の如きものである。「百五十萬人の人間が毎年ベンガル州のみで死亡する。十五歳未滿の少年少女が毎年平均七十五萬人死亡する。ベンガルの農民のとる食事の量は實に微量である。この量では家獸でも五週間以上は生存不可能である。」

我々が作製した處の、農事、經濟、社會狀態の研究調査抄からでも、斯る重大時期に際しては、歴史が示す通り、何かの直接英國統治に對抗する騷動の勃發の懸念を示唆するに足るであらう。いづれにせよ斯く飢饉の頻發は當局に絶對の責任があるのである。

印度が殆ど十二世紀間飢饉を經驗したことは事實である。然し乍らこれは我々がその原因を探査研究せむと欲するも、其自身説明の下し樣なき全く異常なる現象である。斯の如き發 は、餘りにも皮相的であり、且つ無益のことである。

今日印度は印度歴史中最も重大危期を通過しつゝある。再度の飢饉がそれで、而も未だ曾て比類なき廣大なる飢饉に直面してゐるのである。今日印度大陸中何處、如何

なる所、津々浦々に至る迄飢饉の憂なき處は唯の一隅と雖もあるまい。農民は勿論、常に替罪羊なのである。然し、今日印度全大陸を狂暴に狂奔しつゝある此の飢饉は、中流、上流の別なく農民同様に恐るべき力を以て襲ひ貴き命數をさへ絶つてゐる。今日印度に於いて飢饉に襲はれざる地域を發見することは、難中の難たることで、殊に一九四二年九月以來それが甚だしい。

しかしこれは眞に食糧缺乏不足によるのではないのである。食糧は充分にあるのである。

この豐富なる食糧の中に民衆の飢餓に瀕するてふ皮肉なる事實は、彼等が、英國政廳に彼等の食糧を供出せざるを得ぬやうにされてゐる結果なのである。

米國陸軍兵站部長、サマーヴィル大將は、一九四三年二月二十五日、ワシントンに於ける緊急會議に於いて次の事實を告白してゐる。「印度に於けるアメリカ軍の要する食糧の五割二分は印度國内に於いて獲得しつゝある」と。

英米は、彼等の軍隊を印度、イラク、イラン、アフガニスタン、北亞、及びエヂプト等に駐屯し、養ふために、印度より最後の一粒をも掠奪せむとする最も殘忍なる罪科を犯しつゝあるのであるが、而も彼等は公々然と、自由、平等、正義の統帥であると、自稱宣言してゐるのである。

印度飢饉史は、同題目に多數の材料を提供してゐる。而して、英國統治以來、飢饉發生の急速なる頻度の原因に對し、眞實なる洞察を與へる。歴史は印度に於ける最初の飢饉は第七世紀に發生したことを記錄してゐるが、印度全人口の八割三分が土に依存するに至つてより、兇作、不作の場合は必然的に國民的不幸を生じたのである。

西紀六五〇年より一七七〇年の間、即ち英國が軍隊を以て印度制壓を始めた丁度前であるが、これ迄には僅か六度の大飢饉があつたに過ぎなかつたが、一七七三年プラッセイの戰を以て始められた英國の侵略以來、飢饉は頻々と發生するに至り、英國支配の僅か一世紀半の間に十二度といふ多數の大飢饉に襲はれたのである。

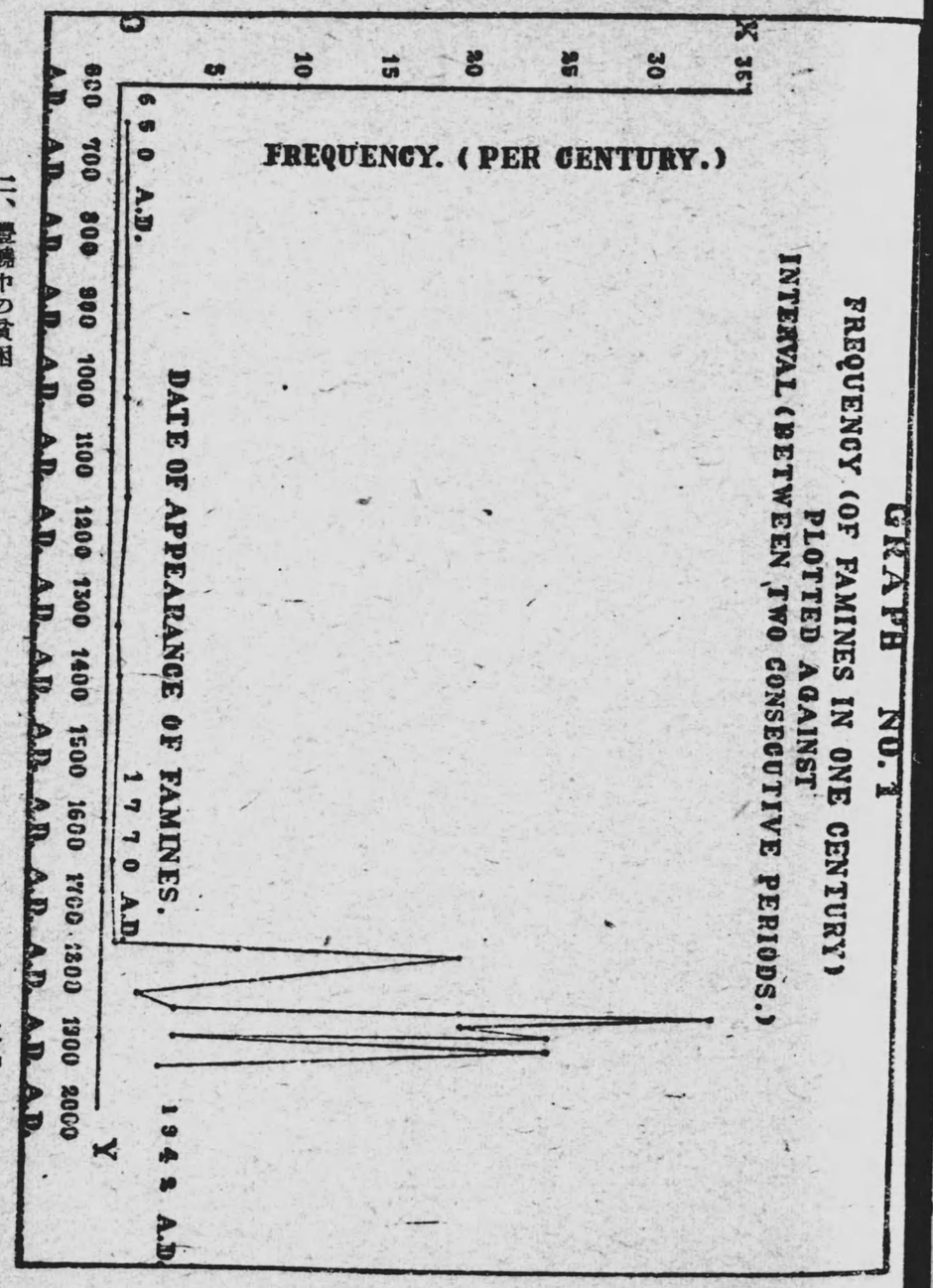
即ち過去千百年間の飢饉發生割合は、僅か一世紀に〇、五三、（一世紀に一度にも當らず）で、英國印度支配、僅か百五十年中に飢饉發生の頻度は實に一世紀七、七七

の割合となる。換言すれば、一七七〇以前の飢饉發生割合は二百年毎に一度で、これに對するに英國統治以來、十三年毎に一度の飢饉に襲はれてゐる。故に、一世紀間の發生割合に於ける增加率は、此の一世紀半の間に四八二、六パーセントといふ率を示すのである。（圖表を參照せられ度し）

圖表一號は飢饉發生度數の線を示し、第二號圖表は第一號圖表の補助圖で、主線は二期間、即ち一は英國統治前を示し、他の一は英國統治後を示すもので、此等の線は事實を明瞭に物語つてゐる。

米英の戰費を賄ふ印度

前記の事實よりして、英國が印度に英國軍隊を駐屯せしむる費用として、印度より莫大なる金を取上げてゐたことは明かなことである。その金額に就いては何をか言はん。彼等が彼等の帝國主義擁護の戰費、一九三九年以來、印度人より强奪しつゝある金額は唯驚嘆の外はないのである。一九四二年十月二十日、英國ラヂオはデリー放送



局を通じ次の如く述べてゐる。「英國政廳は政廳の戰爭努力に對し、最善の努力を盡して協力したる印度人（勿論、英國雇人であり、傀儡であるところの）の忠義に對し、大いに感謝の意を表するものである。印度は既に戰備資金として多大の額を寄附（彼等は此の金を印度民衆より掠奪したとは決して云はぬ）したのである。英國は日々戰費として一千二百萬七千五百ポンドを費消してゐる。

大藏大臣キングレー・ウッド卿が下院に於いて、增額戰費十億ポンド要求の際此の數字を明示したのである。今次戰爭勃發以來、消費戰費總額百二十億五千萬ポンドで前大戰勃發當初三年間の戰費の二倍半に相當するものである。」

軍隊を印度に駐屯せしむることは、我々が聞かされてゐる如く、外國抑壓に備へ防禦するのであらうか。然し、勿論、凡ゆる印度人は米國以外、抑壓せむとしたり、印度の完全性（尤も今は全く完全は失はれてゐるが）を脅やかさんとしたものゝないことをよく知つてゐるのである。印度の敵は唯だ英國帝國主義者あるのみである。

過去一世紀以來、殖民地、帝國主義的食慾を滿足せしめんと種々なる手段、方法を探索野心滿々たる米國人は、英國が東西半球に於いて散々なる敗北を喫したる後、英國の後を襲ふに最も好都合なる場所を見出したのである。

これは如何にも米國人らしく、彼等は、印度が此度こそは巧言、僞瞞を許さぬことを知らず、曾ての大英帝國の遺產を受繼がむと夢想してゐる。

英國が決して印度に獨立を許さぬことは、如何なる老狡なる政略を用ひても印度人を承服せしめることは出來ない。

印度に駐屯する英米軍隊は今日最も原始的なる罪を犯しつゝあるが英國政廳は世界に向つて、一九四二年九月二十三日デリー放送に依り最も殘酷なる告白をせねばならなかつた。「アレン・ハートレイ卿は、民衆（武裝なき）を四散せしめるために五回に渉つて空中より機銃掃射を行つた。副司令官、アレン・ハートレイ卿は、駐屯軍は印度に於ける敵侵入、進駐に備へ、他の安全なる場所に移さねばならぬであらう。萬一移動不可能なる場合は、破壞の手を用ひねばならぬであらう。」

破壞は勿論、燒土戰術を意味するのであらう。此の駐屯は印度の飢えたる住民より

奪ひ取つた食料に依つて養はれねばならぬのみならず、怖るべき戰爭武器は印度人の血の上に向けられねばならぬのである。これ一言にして云へばサディズムである。

カーゾン卿の言葉に、「印度は英國帝國防備計畫中最も重要なる部隊の一つである。英國政廳に對し、有力なる力を常に用意し、尊敬ずべき能力と確固たる勇氣を所持してゐるのである。故に英國軍隊は、民衆暴動に對し我等の法を擁護する役をなすのである」と。

また一英人レオナルド・エム・シッフは次の如く記述してゐる。「印度に於ける英國軍隊の贅澤さは到底筆舌を以ては表現し得ないものがある、——或る地方に於いては、病院備付け寢臺一個に付き一般住民五萬人が向けられるのに對し、英國兵十人に付き一個の割合になつてゐる。」英國人の稱する印度軍とは印度人軍隊といふことではない。印度人には軍隊はないのである。

最近の一作家はかうも云つてゐる。「印度には唯だ英國軍隊の分遣部隊あるのみである。或る部隊には、オーストラリア人、南アフリカ人、カナダ人の如く印度人が配屬されてゐる。但し印度人の場合、特別人種的差別のやかましからぬ部隊のみである。印度人兵は英國將校の訓練され指導され、ロンドンの陸軍省に依り裝備されるのである。彼等の職務中、第一最大なるものは、暴力、乃至無抵抗にせよ政府を崩壞せむと企て、又は組織する革命運動抑壓にある。」

印度に於ける英國軍は、專制主義失政の被包領を助くる爲めに存在してゐるもので、この存在は民衆の國民理想に全く相容れざるものであり、印度國民會議派に全面的に相反するものであり、印度自由の反語である。故に、今日印度の飢えたる民衆が直面してゐる重大問題は單に飢饉のみではないのである。彼等は一方に飢えと疾病と鬪ひつゝ、各町村に駐屯せる英米軍の犯す横暴、專制に抗しつゝあるにも不拘、漸時成功を收めてゐる。武裝せぬ印度民衆と十分なる武裝せる英米駐屯軍との間のゲリラ戰は、マハトマ・ガンヂー以下印度國民指導者達が何等の理由なくして英國政廳に依り檢束投獄された日、即ち一九四二年八月八日より容易ならぬ勞苦のうちに進められたのである。これ一切は印度民衆が、英米帝國主義戰に參加を絶對希望せず、唯だ英

國に向ひ印度を去れと要求したと云ふ單純なる理由からである。

あの日以來、印度人は英國の政治的、經濟的、軍事施設（印度に蔓延しつゝある悲慘事、騷擾を永續せしむる軍用施設）の牙城に攻擊を加へてゐる。印度民衆に向つて展開されたこの激烈なる爭鬪は一九四三年二月十日、マハトマ・ガンヂーの英國政廳に對し無條件釋放を要求したその日より、益々その勢を得た。英國に依り犯されたる不法行爲に對する抗議として、ガンヂー翁は三週間の斷食により自らその苦行を行つたのである。印度の歷史に一大變化を擠すべき英國政廳の決斷を、全印度人が懸念しつゝ待つ重大なる時であつた。

然し英國は猶ほ頑迷に彼等の犯行を强硬に主張した。彼等は不正取得したる掠奪品を戰爭終了迄、維持し續けむとする希望の下に、彼等は印度民衆に對し反對し、威嚇し續けてゐる。

何故英國は、印度、イラン、イラク、エヂプト、アフガニスタン、アフリカ等に斯る大軍隊を駐屯せしむる必要があるのであらうか。

チャーチル並びに彼の同類は屢々此の問に對して答へてゐる。極く最近、チャーチルは聲明を發表したが、「我々は我々自身のものを維持しつゝあるのである、而して現在我々の所有してゐる以上のものを維持せねばならぬのである。」

何故彼等はより以上持たねばならぬのであらうか。英國が若し彼等自身の物を維持しつゞけるなら、彼等は彼等が今日ある如く單に世界各地に居候的存在だけでは滿足出來ぬであらう。英國並びに米國が、より以上所有せんとする間は、永久に戰爭、破壞、頽廢の影は明かるべき水平線に黑く覆ふであらう。

威嚇と約束

印度國民を飢えさせ、暴壓し、開發に濫用し未だ滿足せざる英國は全失業農民、勞働者を强制し英國軍に參加せしめ、英國の爲めに出血せしめんと壓迫し續けてゐる。しかも此の目的を獲得せむと英國は、印度民衆を眩惑せしむる二方法を用ひつゝある

のである、即ち威嚇と約束、而も印度の獨立を除く一切の約束である。然し國民は彼等自身の生存を脅かす複雜なる問題に直面してゐる。それ故に、彼等は英國帝國主義戰援助、協力を拒絶さるのみならず、國民氣力を阻害せむと企つる處の英國支配勢力を斷乎分解せしめむと凡ゆる有効なる手段を講じてゐる。如何なる僞瞞手段を用ひやうと、如何なる論法を用ひやうと、英米が名譽ある聖戰に從事してゐると印度人を承服せしめることは決して出來ないのである。パンディット・ヂャワハルラル・ネルーの言葉を引用すれば、「焙羔肉、薄荷入ソースは食べつけてゐる者に取つては風味ある料理であらう。然し、哀れなる愚者は密接强力なる團結による選定、喜悅に對する犧牲の美を示す最高論理の力を、例へ美食をなすとも理解し得ないのである。」「印度の自由は中流、下級民衆の上に負はせられた重荷、而も堪え得ざる重荷を輕減、否排除するために絶對必要なのである。自由の限度は此の重荷の絶對排除される迄のものでなければならぬ。國民の運命、數百萬人間の運命の危急に際して理屈を述べてゐる餘裕は些かもないのである。」これはビー、ヂェー、ネールの隨筆中にある言葉である。

我々が印度革命の各樣相、災禍の程度を檢討する前に、我々は英國支配、例へば英國の壓制、及びその構成要素を分析して見なければならぬ。美術、音樂、文學、政治は、生計基礎一切が民衆に拒否されてをる處では決して發展、進化せぬことは何人と雖もよく承知してゐるところである。

英國支配下の國內に、例へば印度及び其の他英國殖民地國內に、紛爭、災禍の發生する事實は、英國帝國主義が常に經濟、政治、文化的三方面に對し抑壓政策を强制繼行しつゝあることより生ずるのである。近代歷史家の或者は次の如く述べてゐる。

「印度の黃金は、初期に於いて英國工業の發展促進に多大の役を成した。而して後、印度は英國工業を養ふべき原料物資の大製產者となり、且つ此等工場に於いて製造されたる物品の大消費者が、消費市場と化したのである。——英國は富蓄積に對する熱狂的慾望にかられ、自國の農業を工業の爲めに犧牲に供してしまつた。——英國は殆ど國中茫大なる工業都市となり、印度は英國附屬の一田園鄙士と化したのである。——印度に於いては工業の不振が永久に增大する國民負擔となつてしまつた。印

度は英國機械製品の單なる消費となり切つてしまひ、印度綿工業は慘めにも崩壞し、それに代るべき何物もない有樣である。工業化に對する一切の必要要素、條件は英國に對する贈物に過ぎなかつたのである。然し乍ら英國は此の問題に關しては一切激勵は愚か援助せず、寧ろ機械類に對して重稅を課することによつて其れを阻止せむとした。——斯るが故に國民負擔は益々重く、失業、貧困、さては飢饉と、印度の鄙化、荒頽は益々著しくなるのみである。」

印度國內の眞の經濟狀態に就き全く無智なる或る印度人達は、此等工業不振より生ずる浮遊資金に依つて、印度內に國民的投機事業を誕生さすてふ僞瞞宣傳に喜んでゐるが、一方是に反し印度に於ける所謂スワデシ（自治）工業の發展は印度に投資せる英國資金に相當する程度にまで來てゐる。

經濟的壓迫のみで國民の凡ゆる福利を一切損傷せしむるに十分であるが、然し此の經濟的把握を確固ならしめんがため、英國は被征服國民の要望する所謂自由を常に嫌忌、排斥し、自在なる手の中に收めたる附屬地支配行政なる手段に依り、政治的抑壓もせざるを得ないのである。地方自治てふ形式の議會政治、條例形式による虛僞立法、新憲法なるものが許可されたが、然し乍ら、勿論、此等の許可は、經濟的、行政々策、執行權を犯さざる限り、換言すれば印度に於ける英國特權に觸れざる限り有効なのである。是が即ち英國行政々策の金言であり、如何に英國が政治的抑制に對して、殖民地並びに印度行政々策に巧妙なる表現を見出したかを示すものである。此の模範的英國行政こそ、英國政治の妖怪そのものである。

文化的壓迫

英國帝國主義に附隨する制壓の第三部面は、二つの主目的を持つ文化的壓迫である。即ちその一は、智識の頽敗、及びそれに關連せる土著文化、系類の殿堂破壞である。其の二は、全面的外國文化注入に依り思想代替、即ち印度人社會へ英國思想、習

慣、風習を取入れさせ、これに依り文化的轉換を企圖し同文同語の新人種を創造して、英國妖怪の自由に躍らしめうる地位に置かんとするにある。

英國殖民地各地に於けると同樣、印度に於ける英國政廳に依つて組織されたる敎育制度は、年々英國敎育制度に敎育されたる數千數萬の雜種を作り出すわけで、殊に甚だしきは隣國事情、即ち習慣、信仰、思想、文化に就いて全く無智にされる結果である。この事實は以て英國敎育制度の如何が說明されるのに十分であらう。學校卒業者の果して幾人が、ビルマ、セイロン、支那、泰國、日本、エヂプト等の事情に就き、彼等に與へられたる敎科書中の眞疑、虛僞を知り得る者があるであらうか。此の事に關しては前述のビルマ、マライ、セイロンの學生に就いても云へやう。彼等の隣國につき印度に於ける以上に敎へられた者は一切ないのである。此處に斯の如く英國敎育制度の狡猾、陰險性がある。亞細亞各民族間の思想交換、智識の交和、文化協力等を阻止し、その發展を防害せんと英國政廳は最も橫暴非道なる手段を平然用ひて憚らない。

斯る間に、英國帝國の此等原住民學生が、ロンドンの、またニユー・ヨークの大路小路に就き語り、英米人の趣味性を尙び、感受し、キーツ、シエクスピアの論文を書く、而して彼等は恐らくカリダス、タゴール、イクバル、米・野口、老子、孔子、孟子等を一見だにしたことはないであらう、斯る事實は誠に悲劇と云はざるを得ない。或者に至つては孟子、老子或は米・野口等聞いたことさへないであらう。

斯る憐むべき實狀を、亞細亞の自由國日本の現狀に比較して見よ、……日本に於いては文化的大區劃の內に明治維新以來の文化共生制度が普及し、外來文化の寄食に反對するもの、(印度にも是は流行しつゝあり、)が確然としてゐる。外來文化の寄生過程を經て、即ち、二個の異れる個體が相互扶助、利得する生物學的現象に於いて、完全なる調和を見出し、新らしき文化、而も同時に東洋、西洋よりなれるものが日本に展開して來たのである。文化的結合の健全なる所產として兩文明は完全に日本に混合したのである。英國、米國、和蘭統治下、西歐風に强制される不幸を持つ、他の亞細

亞國と異なり日本は、系統的に不惑のうちに同化してしまつたのである。生氣に溢る日本の觀念と、近代科學思想と日本本來の文化の溶解の結果は日本の社會各層に充溢した。此の日本の狀態を、印度の思想、利益を完全に變化させ、印度の文化的力本說を根本的に荒頽せしめた英國の教育制度に比較して見る時、そゞろに戰慄を禁じ得ないではないか。しかも斯る狀況の下に印度社會は智的貧困を經驗し始めたのである。

印度民衆は事態の重大性と緊急なる時局を認識し、英國が印度民衆の喉元へ押付けたる有毒無益なる教育制度に斷乎抗しつゝ、印度國民會議を通じ、ワルドハ教育制度採用を發布した。

貧困と無學は兩立して手のつけられぬ惡德社會を構成し、兩者互に唖合ひをしてゐる有樣である。貧困の增大、飢饉の頻發に比例し惡疫、文盲は益々增大、蔓延し暴動氾濫を來す。是は一つに印度民衆の九割が哀れなる無學なる爲めである。然し、此の

狀態を永續せしめんとして英國政廳は、民衆が社會的、經濟的に有益なる處の英國の技術、文科系教育のいづれをも得んとせぬためであると嘯いてゐる。

十八世紀初頭迄、印度は文學的、天賦的の最も發達せる教育制度を維持し得た。而して哲學、心理學、美術の發展はその頂點に到達したのである。英國支配に依つて與へられたる印度原住民西歐化の手段、英國統治本來の性質に附隨する勢力は、印度本來の教育制度の發達を阻止、拘束せるのみならず、凡ゆる承認を超越し彼等の個性を奪ひ去り得るのである。悲しむべき此の結果として、今日斯る教育制度を三ヶ村に一を見出すことが困難なる狀態となつてしまつてゐる。印度總人口の僅か一割が讀み書き可能で、約二分五厘の者が英語を讀み、書き得るのである。教育問題に於ける英國政廳の無能振りは、教育を受けたる人間も斯る狀態にあるので、莫大なる費用を要する在印度米國創立又は政廳大學卒業者ですら、獲得した智識に於いては有能なる市民としての資格を備へてゐない。そして彼等の大部分の者が就職難、或は非常なる低廉

の給料に出會ひ、且つ彼等が大學に於いて受けたる不完全なる教育に依り、如何して彼等が有能なる市民となりうるであらう。社會的、道德的、政治的惡は互ひに密接に交錯し、接置し合つてゐるので一方滅すれど、他方に發生する。極惡の聚積は國民的企業に反抗する結果を生ずるのである。英國政廳が此等の諸惡の唯一の製造家である事實を無視する要求は出來なかつたのであらうか。若し此等の諸惡が外的動因が斯程に有害ならぬ行政制度の副產物であつたとするなら、恐らく實狀は斯程に憐れむべきものではなかつたであらう。黃泉への道でさへ何等かの好意が用意されてある筈である。然るに、英國は、彼等の黃泉への道には善にして名譽ある動因が用意されてあるとは絕對云ふことは出來ぬのである。彼等を不名譽に導く道には唯惡意のみが置かれてあるのみである。今日、何人と雖も此の事を、よく知つてゐるであらう。

文化は餘裕を必要とするものである、殊にその發展、進步にはその多分を必要とする。英國支配下に分離され、分散されたる印度に於いてはこの文化發展は到底望み得ないのである。如何となれば、文化は靜的のものではなくして、動的のものである、――さうあるべきもので、然らずんば文化と稱し得ない、――而して斯くある故にその實體の上に生長し培ふのである。

諸惡の壓力、强制、混合の下に、或は不自然なる環境の下に苦惱する國に於いては文明は萎縮せざるを得ず、遂には斃死するに至る。自由のみが文明の機能を活躍せしめうる呼吸である。

近代學術の進程――西歐文化――と現在の印度國民的觀念との間に、タゴール、ベッサンツ、ラマ　モハン　ロイ等でも橋渡し出來ぬ一罅隙が生じたのである。唯是に連絡關係付け得るものは、印度完全獨立あるのみである。

さて發生以來八十年、創始觀念、機巧なる手段、方法を刺戟し、印度國民をしてその奴隷位置より解放せむと斷乎國民を爭鬪に導入したる勇氣を與へたる處の、印度國民的觀念を檢討して見やうではないか。

此の爭鬪に就いてパンディット・ヂャワハルラル・ネールは次の如く記述してゐる。「鬪爭期間中、我等の位置を築き、統一し、又國家觀念を發展せしむる方が、その爭鬪の後に來る崩潰せる狀態に於ける上より遙かに容易である。」

爾來、印度國民會議派は、印度に於ける英國に依り成されたる政治的、經濟的、文化的抑壓の所謂惡の三幅對を根絶せんと組織的に工作する光明を見てゐる。故に、獨立は我等のみのためとは云ひ得ないのである。然し凡て外國支配より離れたる完全自由、――此の場合英國が外國支配を代表せる故に、――我等の自由は英國關係の一切根絶した後に於いてのみ獲得しうるのである。

パンディット・ネールは、今日印度が抑壓されたる世界の凡ての人々を解放せんと演じつゝある處の役割の重大性を强調し次の如く述べてゐる。

「亞細亞は國民主義と帝國主義との爭鬪する主戰場である。亞細亞は未だ歐米に比し、未開である。若し彼等に購買力あらば、物品消費一大人口を亞細亞は所有することとならう。近代生活は非常に複雜化し、密接せる相互依存となつたので、協力こそ生活維持絶對の力である。然し、英國帝國と眞の世界主義は南北兩極が離れてゐる如く相距つてゐる。而して我が世界主義に到達し得るのはその帝國を通じてゞはない。それ故に、英國帝國と帝國を支持する一切のものを斷乎徹底的に葬らねばならない。」

印度の狀態に就き深く知らぬ者でも、印度民衆に依つて顯示された國家觀念的感情の光の中に、全國內に活躍しつゝある印度革命が、日々大なる勢を得つゝある理由を理解出來る筈である。

「此の宇宙に於いて死するものはない、一切は不滅であることは眞理である。我々が死と稱する處のものは、唯形が變つたに過ぎない。その力は逆の世界に働きを生ずるのである。濕氣の中に腐る木の葉も、なほ力を持つてゐる。何物ぞ腐り果て消滅すべき。」

と佛蘭西革命史の著者トマス・カーライルは書いてゐるではないか。此の事は、我々は既に冒頭に於いて述べたるが如く、凡ての革命の眞理である。印度は今日、非

常に有力にして而も動的な國民的觀念を確保してをり、それは我々の一人一人に就いても誠に明瞭である。此の觀念こそ印度人固有のものであり、而して西歐より輸入せる觀念の些かも混入せざるものである。

若し印度人の心が、英國並びに米國の所謂デモクラシー制度に依つて述べられたる如く自由主義に非常に馴れたものであり、西歐に於いて作られたる多くの主義の効力、社會萬能藥に就いて些か懷疑的になつたとするなら、懷疑主義に責任を持たねばならぬのは英國、米國のみである。

前世紀後半頃迄は、實際に、印度人は英國は歐洲の代表者であるのみならず、歐洲の提出せる凡ての名譽の印を保持せる國と信じてゐた。此の混亂と不幸は、歴史的事故、即ち英國の印度征服に依つて明らかにされた。逆説的に英國壓制は純粋印度國民的觀念を誕生せしめたのである。印度は英國帝國主義を斷乎微塵に粉推し、此の地球上より抹殺せんと決意せる印度の友邦が、歐洲にも亞細亞にもあることを理解し始めたのである。

印度の自由獲得戰に、一切の道義的並びに物質的援助を約したる樞軸國は、武裝なき印度數百萬民衆に對してのみならず、又樞軸國自身英米世界制覇の野望に終止符を打たんと決意したることに依つて、此の約條の眞なることを證明してゐる。

印度は今や英國と鬪ひつゝある。而して此の戰は政治的、經濟的、文化的獨立の完成せられる日迄繼續されるであらう。革命は飢餓、抑壓、疾病に培はれる。而して元來此等の力は破壞的色彩、殺戮的性格を有することに體現せられるのであるが、破壞、抑壓者掠奪に依つて開始せられるものである。印度革命は此の眞理の最も新らしき表明である。新らしき活力勇氣は漸次國内に湧出しつゝあるのである、——此の活力、勇氣こそ、革命を誘發せしめたる處の力より、より一層强力であり、更に破壞的なもので、此の力は今新たに生じたものではない。又自然現象でもない、緩くりではあるが、順次に發達して來たものであり、印度の心の底に眠つてゐたのである、恰も母の胎内に胎兒が居る如く靜かに、生育して來たのである。此の眠れる力は、その本

來の性格、激烈性に突如變化する外的刺戟の素因であつた。その先驅はマハトマ・ガンヂーに依り說かれたる無抵抗主義である。然し、一度これが衝擊を受くるや、外部的力を求め、突然逆變したのである。そしてその外的衝擊こそは勿論英國暴壓である。

この變化の現はれた時、有力なる無抵抗主義の力が動的なる革命的力に轉じたる質、量共に兼備したものであり、いづれもその効果に於いては創造的、破壞的である。即ち英國に對しては破壞的であり、印度民衆に對しては創造的なのである。而してそれは今日、僅か一日前昨日あつたより以上主觀的力となつて來た。過去に於けるその力は物質破壞否定にあつたのであるが、その攻擊は殆ど倫理的、逆義的方面に加へられて來た。行動の必要性を無視してゐたわけではないのである。無抵抗主義の說をパンディット・ネールは次の如く說いてゐる。「論爭、挑戰なく、無抵抗の大衆が强迫と鬪ふ事實は、自分にとつては、他方面を威嚇することを意味する。即ち印度に於ける英國商品不買は明らかなる例證である。」無抵抗主義は其の當時としては止むを得ぬことであつた。而して印度民衆はその重要性を認識しつゝ、彼等の國民的觀念の完全なる一部面として採用したのである。

今日に於いては、その力は行動の中にあり、不協力運動と並行し、相互扶助し合ひつゝあるのである。サボタージュ、抗爭、不協力は印度國民の用ひる英國帝國主義崩壞手段である。印度國民主義觀念は遂に現在の革命にその成す處を得た。而して既に積極的力となつたのである。

さて諸君は力は創造することが出來ぬと同樣に破壞することは出來ないであらう。だが、唯其の質、その方向を變へることは出來るのである。英國政廳は此の力を粉摧せんと企て、凡そ考思される凡ゆる殘虐、苛酷なる手段に出てゐる。然し、これは確實に此の觀念を成熟せしめるに役立つのみなのである。

印度國民的觀念は印度人が印度の敵英國を破摧せんと採用したる手段のうちにあるのみならず、又我々の望む最後のうちにもあるのである。

正義は力なり

印度革命はその標語として「力は正義なり」はとらない。之に反し「正義は力なり」を我等の標語とする。今や、我々は誰が眞理、自由、正義のために戰ひつゝあるかを十分に認識してゐるのである。

簡明に云へば、「印度人をして永續的奴隷の位置に置くこと。」英國は此の現狀を飽く迄執拗に維持せんと足掻きつゝあるか、或は生存のために眞に戰ひつゝあるのは印度人であるか。印度革命のみが、印度の生血そのものを吸飲し、印度にある善美なるもの一切を破壞し、印度國民にとり懷しく、親しき凡ゆるものを蹂躙する處の英國寄生虫を撲滅することが可能なのである。それ故に、此の爭鬪のうちにある印度のみが、眞理、正義のために生きる凡ての人の同情を得るのである。

沒落し行く英國勢力を破壞するため、我々はその手段、方法を無視する。又英國が我等の祖國に置く一切のものに與へる損失、災禍の程度に就いても同じく無視するのである。從て我々も是と全く同樣のことを豫期し、明日の世界の人々より、今日の賢明なる人々より英雄として、勇敢なる殉敎者としての賞讃を得むと覺悟してゐる。

印度國民主義者に依つて投ぜられる一個一個の爆彈は唯に敵を挫折せしめるのみならず、また印度國內、國外に居る凡ゆる印度人の心に新らしき希望の光明を點火するであらう。印度に於ける政廳建造物中に、今日發生する凡ゆる爆發は、我々の心に新らしき響を與へると同時に英國の心膽を寒からしめるのである。英國に向けて我々の狙つて射つ銃聲は、我等の歌「新しき印度の歌」に對し妙調を與へるのである。

凡ゆる政廳建物の灰燼中より、凡ゆる鐵道驛より、凡ゆる英國牙城、兵舍の中より、新印度、自由印度の健全にして有力なる要素が芽生え出るのである。何時にても我等の同志は電信、電話線を切斷するであらう。我々は奴隷の桎梏を斷ちつゝある。仇敵の絆を切り離しつゝあるのである。

英國が印度人一人を殺さば、十二人の新らしき愛國者が生れることを確信する。而

して此等の英雄的行爲に積極的に參加せぬ者と雖も、協力拒否に依り英國政廳に對し、て激烈なる不利、不便を與へるであらう。且つ彼等の光輝なる目的のために彼等の職業さへ犧牲に供しつゝ努力するものと信ずる。

印度革命の持つ唯一特別なる點は、從來歷史中に見られる革命とはその種を異にしてゐる。即ち印度革命は背後に國際的使命を持つてゐるからである。例へば、未だ英米支配權の及ぶ他の亞細亞各國に、此の革命の齎すであらう處の驚異すべき影響が考へられるのである。

印度は武器、彈藥の不足なるに不拘、革命は驚ろくべき勢を得つゝある。而して、印度內外より目標に向つて攻擊した結果、曾て世界の覇權を自稱せる英國帝國が凋落の度を速めつゝある事實に依り、刻々活氣を增大しつゝあるのである。

而して我等の爭鬪は續くであらう。例へ百年經やうと、英米が最後方寸の土地を引渡す迄、彼等が他國より掠奪したる凡ゆる特權、特典を放棄する迄續けるであらう。その時こそ、印度は、否世界の凡ゆる屈伏せられたる國々が自由に呼吸しうるのである。而して米英帝國主義崩壞と同時に完成する新秩序圈內に適當に行動しうるのである。

今英國牢獄に拘禁されてをるパンディット・ヂャワハルラル・ネールは印度國民に對し次の如く書いてゐる。「たとへ我等の目的實現がおくれるとしても、我等の歩みが正しき方向に進み、我等の眼が確固前方を凝視してゐるなら、我等又何をか云はんや、である。」

而して我等は血と破壞の路を橫切り飽く迄前進するのである。而して勝利への階段は苦痛の血と涙で血塗られるであらうが、然し遂には勝利の決勝點、永遠の光榮に到達するであらう。

汚塵と疾病、生硬粗雜、功利的醜陋、社會不安に我々は今日患されつゝあるのであ

るが、これは我々が獨立を獲得せる時のみ我等に來る處の全なる文明に向つて移動しつゝあるのである。如何となれば、我等の指導者ガンヂー翁は、英國牢獄酷烈なる防壁（記憶せよマガ　カーン宮殿は直ちに最も恐怖すべき獄舍に變るのである）の後より斯く叫んでゐる、「眞理は終に必らず勝つ」と。

バンデー　マータラム

パンか彈丸か

パンか然らずんば彈か、殘忍なる英國は問ふ、
パンは英國に血を捧ぐる者へ
自由を護る者へは彈丸を
何れを選ぶ、パンか然らずんば彈丸、
雄々しき印度人は即座に答ふ、
勿論、彈丸を、と

掠めたるパンに何ぞ執着を持たむ
その掠めとりたるパンには
我等の惱める同胞の
あゝ血、汗、死の臭が浸みてるのだ、
然し、我が求むる自由は今はなし
自由のみ我が口にうまし
自由こそ我が痩軀を包む、
汝等の非道なる砲火に拉がれ
汝等の暴政に抗して瘠せたる此の體を、
彈丸を與へよ、我にパンはなけれど、
斷じて受けず僞瞞の手にあるパンを
そのパンこそ我が同胞より奪つたのだ。
彈丸を與へよ、今、血は怖れじ

母國のために、名譽、自由のために。

戰慄し呻けり、我が仇敵は、
汝愚言もて我を詰れ
されど汝等を許す、パンか彈丸か
汝等がいづれをとるか決する日迄、
再び聽け、我等はパンを與へむ
我等の意志に從ひ我等の軍に來る者に、
されど我等の射つ彈、無數の彈丸は
我等が法に背き抗する輩の頭上に
我等に抗し我等を威す輩の頭上に
汝等の叫びは斯くやあらむ
自由を與へよ、然らざれば奪ひ取らむ

我等請ひて自由をとらず奪ふのみ、と。
おゝ、何と彼等の愚かしき
英國が我等の聲を聞くと、誰が信ぜむ
東西を蹂躙せる暴虐なる英國。
おゝ、何と彼等の愚かしき
英國の醜戰努力、我等への命令
何人ぞ敢えて追從せむ。
「印度を放棄せよ、我等の祖國を去れ
舞ひ戻れ汝等の不毛の島へ
不毛の英國、殘虐の母國へ
印度を放棄せよ、戰ふをやめよ
我等神聖の土、印度人の印度。」

「來れ、パンを與へむ
若し英國に血を捧ぐるなれば。」
然れど斷乎叫び續けるであらう
「出て失せろ、汝殘忍な英國
出て失せろ、自由か然らずんば死。」
捕はれの志士牢壁に默す
永遠の沈默か、あゝ英國の手にあり、
「答へよ速かに、何れをえらぶ
このパンか、然らずんばこの彈丸か」
心澄みたる志士は微笑みぬ
聲高かに、威義正して答へぬ
「彈丸なり、勿論彈丸をとらむ
掠め取りたるパンに何の望あらむ

その掠め取りたるパンには
我等の惱める同胞の
血、汗、苦悶の涙に濕りあり
おゝ彈丸を與へよ、
おゝ不淨なるパン足踏みにせむ。」

× × ×

指先動きて引金は引かれたり
あゝ一瞬、銃聲
砂塵を混えたる硝煙の彼方に反響(ヒヾキ)あり
「印度に榮光あれ。」

× × ×

あゝ靜寂、志士は眠れり
あゝ何處より、虛空の彼方より

聖者の告ぐる聲は響きぬ
我が義務終れり、同胞よ義務を果たせ
道は明らかなり、進め印度へ
進軍せよ勝利へ！
あゝ聲は響き渡りぬ、同胞は進み唱ふ
あゝ、印度自由の歌を。

三、英に最後の判決下る

東洋の牙城崩る

マライに於ける強力日本軍の無敵攻撃の最高潮を示した千九百四十二年二月十五日のあの歴史的事實は、アングロアメリカ勢力撃滅の日本聖戰の分岐點であつたのであります。

あの劃期的日は大東亞戰第一段階の輝かしき勝利の終結を證するものであり、實に東亞に於ける米英勢力、特權の運命に最後の判決を下した日であります。

マライに於ける日本軍の目覺しき攻略、絶對不落と誇りに誇つたシンガポール牙城の攻撃開始以來僅か七十日以内に陥落した事實は、米英戰に對する日本の最後の勝利

への第一階程を保證するものに外ありません。而して日本の勝利の確實性と英米帝國主義兇惡勢力の崩壞に依り、新生、希望、勝利、光榮の新時代が全亞細亞の黎明をして來たのであります。シンガポール陷落は啻に軍事的に重要性を有するのみならず、種々なる重大意義を與へたのであります。

亞細亞諸民族數百萬を奴隷化し、窮乏のどん底に陷入れ、なほ、倦くことなく數百萬の民衆を低級、卑俗化せしめた處の横暴不逞なる帝國主義態度の最も屈辱的終焉を如實に示したのであり、且つまた亞細亞の自由、幸福、繁榮の新秩序の發端を下したのであります。シンガポールより昭南への改名の歴史的事實は亞細亞更生の基石として重大なる意義を有するものと考へます。

シンガポールに於ける英國の敗北は日本陸海軍の南海地域攻略の發展と成功を多大に利し、爲めに數百萬インドネシア人を桎梏より解放したのでありますが、さらに英國のシンガポール敗退より續いて無敵日本軍はビルマより英軍を追放し、ビルマ民族の自由を確保しました。なほ、マライ、ビルマに於ける日本軍の輝かしき勝利に次いで印度の自由即ち長期に亘る英國の束縛、搾取よりの脱却が、愈々確實となつたのであります。

シンガポール陷落の次日、大日本總理大臣陸軍大將東條英機閣下は帝國議會に於いて、日本が亞細亞に於ける英米暴勢力擊滅の戰端を開いて以來初めて、印度獨立問題に言及されました。私はその日の、東條閣下の劃期的宣言を想ひ起す度毎に萬感胸に迫り感激感動を禁じ得ないものがあります。

眞摯斷乎たる確信を以て東條閣下は印度並びに世界に向つて呼び掛けられました。即ち「日本は印度國民が英國の非道なる專制主義より脱出せんとする愛國的努力に對し全幅の支援を惜しまぬであらう。斯くして印度人の印度としての地位を獲得し、大東亞建設に參畫することを切望する」と。

シンガポールに於ける英國の慘敗は、斯くの如く、英國帝國主義に對する印度の英雄的抗爭を全面的に援助するてふ日本の誓約の日を立觸したのであります。

シンガポールは大東亞に於ける英國帝國主義權勢の稜堡でありました。シンガポールより英國は南海諸地域を支配し、且つ同所より憎むべき米國同盟の助力に依り日本に對する英國帝國主義暴制の直接攻略の手を延べんと畫策してゐたのであります。英國が印度に於ける不正掠奪による自國帝國の權益を擁護せんとした處こそシンガポールに外ありません。而して印度を飽く迄奴隷として蹂躙し續けんとして英國がシンガポールに彼等の堅固不落の牙城を築いたのは、外ならぬ莫大なる印度自身の金であり、印度の人力に依つたものなのであります。

然し乍ら、日本の歴史的勝利とシンガポール崩壞は大東亞を支配せんとする英米の空しき夢を痛快に打破り、彼等の運命を明確に現示したのであります。シンガポール陷落するや忽ちにして英米勢力は亞細亞全地域より脆くも追逐され、日本陸軍はアッサム戰線まで進出し、又日本海軍は印度洋にその覇を制するに至つたのであります。

印度の英國桎梏を破壞し自由たらんとする希望は今やその頂點に達し、マハトマ・ガンヂー指導の下に、印度國民は全印度各地に渉り敢然抗英戰の烽火を上げ、武裝せざる印度人と近代的重武裝せる英國とのこの爭鬪は印度人の言語に絶する憤怒の一火塊となり猛烈苛極に展開されてゐるのであります。而して日本軍は共同の敵に對する印度國民主義勢力の英雄的努力に對して既に援助の火蓋を切りました。シンガポール陷落以來開始された印度獨立最後の爭鬪が今や決定的段階に入つたことを確認するものであります。

マハトマ・ガンヂーは、印度に於ける英國の野蠻行爲に對し、苦行の抗議に依り、全世界の正義感を喚起しました。ガンヂーは今こそ全印度人が最高の犧牲を拂ひ、仇敵英米に對し致命的打擊を加へる時であることをよく自覺してゐるのであります。

而して日本の無限の助力を以て、印度が必らず完全獨立の國民的勝利を獲得しうること、又日本の共同努力に依り、印度は必らず印度人の印度を建設しうることに些かの疑念はないのであります。日本と手を執つて、印度は亞細亞の榮光再興のため、印

度の最も正しき役割を果すことと、絶對確信するものであります。

バンデー　マータラム

儼たり！　日本

世界歴史發生以來無數の帝國は興亡し、或ものは既に遠く十五、六世紀以前に忘却の過去に消滅し終つたのであります。今日、唯僅かに二三の一等列强のみが現存する有樣で、その古きを尋ぬれば日本を除きては十世紀を越ゆるものではない。

斯く帝國の光輝、確固たる點に於ては、日本帝國獨り世界歴史中に嚴然たる位置を構えてゐるのであります。此の大東亞帝國は嚴として二十六世紀有餘の歴史を飾つてゐるのであります。

神武天皇即位皇統を築かせ給ひてより今日に至る二千六百四年といふ長年月を正確に經てゐるのであります。而して此の長年月輝かしき不敗の記錄と一糸亂れざる神聖なる皇統が存してをるのであります。

此の大歴史的記錄は如何なるものにも勝り、日本國民に對し、完全統一された國體、皇室に對する盡忠精神に基礎付けられたる道德的法典を附與したのであります。

日本の傳統に從へば、皇室の民を見ること愛情寵めたる赤子の如く、民の上を仰ぐこと最高の尊敬、忠誠、歸依を以て崇敬してゐるのであります。

日本帝國の歴史は誠に悠久であり且つ多事多難でありますが、その皇室の神聖なる位置、日本國民の道德的教典は絶對不變のまゝ現存してゐるのであります。

斯く今日をトて紀元節は日本帝國日にて誠に記念すべき日でありまして、これは唯に日本國民にとつてのみでなく、此の歴史的大戰に於ける日本の勝利の結果自由人たり得た亞細亞諸國數百萬の人々、並びに八紘一宇の日本精神に從ひ進歩、發展新時代を約束されその國に立つた國民にとつても絶對記念すべき日であります。

二世紀の長きに渉り英國帝國主義の抑壓下に喘ぎ奴隷化された印度國民にとつて、

又完全獨立最後の戰に敢然挑戰してをる印度人にとつて、今日のこの日本帝國記念日紀元節は特別重大意義を持つてゐるのであります。全日本人並びに亞細亞全民族の記念する今日は、印度人國民をして英國帝國主義到來に依り失つた處の貴重なる遺産を想起せしめるのであります。

又此の日は印度國民をして惡魔の如き英國人により無殘に踏み躙られた眞の印度理想、傳統を想ひ起さしめるのであります。

此等の高貴なる理想、傳統は他の亞細亞民族即ち日本國民に取り入れられ正義、正道の强力な力に發展せしめられたのであります。そしてその力こそ、全亞細亞民族解放の偉大なる仕事となり、亞細亞民族の古き榮光を再興せしめんとする力となつて現はれたのであります。

今日の歷史的日、亞細亞的精神復活の日は印度自由鬪士に對して新しき生命、新らしき希望、新らしき信條を與へるのであります、而して戰鬪完勝の新しき決意が附與されたのであります。

過ぐる二十六世紀の長期間に日本は盛衰の幾星相を過ぎたのでありますが、今日の輝かしき進步發展、實力を確保したのであります。

明治維新以後國際干涉を受くるに當り、日本には果然新らしき國民自覺が湧出したのであります、その自覺は國內混亂の統一、外敵完全防禦の確立を目差したものであります。

これこそ誠に明治維新を完成せしめた處の日本國民本然の精神であります。

日本は西歐文化風潮を取入れ、又相當同化したのでありますが、日本自身の文化、文明の最善、最高尙のものは悉く殘してあるのであります。

日本に依り同化せられたる凡ゆる西洋流は急速に進步し行く世界に直ちに適當に競ひうるやうに消化されたのであります。是に依り日本の安全と進步が確保せられたのであります。

日本の西洋流接近と英國帝國主義者の印度人の喉元へ西洋流無理押付けの事實のそ

の對照の偉大さは如何でありませう。

日本は西歐流を同化改良し自國の利益に轉換したのに反し、印度は英國の奴隷になるために西洋流採用を無理强ひされたのであります、斯くして英國帝國主義に奉公して來たのであります。

然し印度は今日斷然アングロサクソンの枷を打破する決意したのであります。印度東方の凡ゆる亞細亞國民は既にアングロアメリカ制壓より解放されたのであります。而して此の大東亞戰爭は全亞細亞の解放、全亞細亞の自由、輝光の再興のならぬうちは終止せられぬでありませう。

亞細亞は一であります。

世界の屋根ヒマラヤ山脈は、世界に於ける最も卓越せる文明を印度と支那とに二分したのでありますが、然し恐るべき萬古雪の要害も、今日新しく目覺めたる亞細亞的精神の刻印たる究極、普遍に對する偉大なる慾求の奔流を遮斷することは出來なかつたのであります。

日本は亞細亞大陸より長峽の海に距てられてをり、印度よりは大なる陸と海に依つて相離れ合つてをるのであります。

日本の政治家は、其の昔日本の印度に負ふ處大であつたことを幾度か認められました。而して今日全日本國民は全面的に印度を支援し、完全獨立確保、印度人の印度を建設し、亞細亞再興の正しき職務を印度が果し得るやう、凡ゆる好意の手を差延べてゐるのであります。

四、ガンヂー翁の抗英

斷食は神への訴へ

祖國に於ける愛國者諸君、

私は諸君に對し、マハトマ・ガンヂーの斷食が唯に印度四億民衆にとつて非常に重大なるのみならず全人類にとつても誠に重大意義を持つてをることに就き御話ししたいのであります。

印度人のみならず、全世界正義の士が、殆ど奇跡とも思はれたガンヂー廿一日間の斷食を成功裏に完うした時、全く安心の歎息を洩らしました。

然し乍ら印度に於ける英國支配者並びに米國共犯者共にとつては、ガンヂーの斷食は帝國主義的壓制、世界支配の巧妙なる計畫に對す單なる不吉なる威嚇に過ぎなかつ

たのであります。

ガンヂー翁の苦行を通じ、若し印度抑壓の手を引かざるを得ぬ現實に直面せば、アングロアメリカ人共は戰に破れ、世界支配の野望は消滅の餘儀なきに立到るでありませう。

如何となれば、彼等の宣傳機關はガンヂーを誹謗し、且つ翁の斷食を以て過失の告白となし、絶望の身振りと云ひ或は政治的恐喝行爲であると公々然非難攻擊するに餘りにも多くの時間を費やし過ぎた理由によるのであります。

印度に於ける英米人は其後此等の泥投げ式醜態、惡策誹謗を曝け出したのであるがガンヂー翁に對しては全く觸れずに放置したのであります。彼等のガンヂー翁に對する怯病なる攻擊は單に翁の前に誹謗者としての化けの皮を剝いで見せたに過ぎなかつたのであります。

ガンヂー翁の斷食は、眞の意味に於ける神への訴へであつたのであります。マハトマ・ガンヂーは印度の全魂を摘要したものであり、翁自身が正義、幸福に對する世界

の希望を象徴したものであり、又全人類の高尚、崇高なる生活を象徴したものであります。

翁は此の斷食に依り貴き翁の生命を犧牲に供せむとしたのであります。――この大犧牲に依り、世界の人々の憧れ希望の實現に一歩たりとも近づかしめむと希望してゐたのであります。

マハトマ・ガンヂーが唯印度獨立の爲に苦行したのである、と云ふは大いなる過りであります。

翁は、人種、宗教、國柄の差別なく人間に對する愛より出でたるに外ならぬのであります。翁の思ひは印度國境を越えた遙か遠くにあり、世界の自由、世界の獨立、最少、最弱なる國民にも公平なる正義、此の地球上にある最も日蔭にある人々にも平等の幸福の行き渡ることを夢想してゐるのであります。

ガンヂー翁は世界に於ける最善、最高の總てを代表してゐるのであります。而して翁は翁の生涯をよりよき世界へ献じたのであります。

翁にとつては印度の獨立は最後のものではありません。印度の獨立は單に、世界の自由、世界の獨立、よりよき、より幸福なる世界確保の一手段に過ぎぬのであります。

印度が自由であつた時代、印度は世界の文化、文明に多大の寄與を致しました。印度は精神文化の標光を全世界に放つてゐたのであります。而して美術、工業に於いても亦印度の名聲は地球の隅々に至る迄普及してゐたのであります。

斯くの如く印度は世界の四方周圍に光明、幸福を與へ、世界の中心地であつたのであります。

然し乍ら今日、印度が外國支配の精神殺戮二世紀後の今日は弱少國家群を奴隷化するに便利なる武器と化身せしめられて終つたのであります。

奴隷化したる印度は英國帝國主義者壓制の不本意乍ら基地どして役立たせられてゐるのであります。

英國が世界支配の本城を築き上げたのは、印度の奴隷化基礎によるものであります

す。從て印度の自由は英國帝國の崩壞であります。

又印度の自由は、數多の被征服國家群の英米帝國主義桎梏より自然解放を意味するのであります。

斯る間に、又もや人類にとつて新しき而も避け難き恐威が、世界支配てふ米國の野望の形となつて出現したのであります。

此の恐るべき米國の世界制覇の影は既に印度を横切つて現れて來たのであります。米國は英國を押し除け、世界制覇の第一手段として印度支配權を確保せんと既に決したる如くに思はれるのであります。

然し米國人は既に充分なる滿足を以て時期到來を待つてゐるのであります、又殖民地支配の經驗深き英國の遣口を北叟笑みつゝ眺めてゐるのであります。彼等は英國がエヂプト國内問題に勞せずして勝手なる干渉を成し遂げた手本を既に覺え込んでおります、而して米國人は此の手本に從て、目下しきりに印度に於ける英國の手に代らんとしつゝあるのであります。

米國人は英國の殖民地支配手法を喜んで踏襲せむとしてゐるのであります、その理由は英國法が最も利益ありと考へるからであります。

米國は結局世界支配の野望を滿足せしめんと畫策してゐるのであります、それ故に先づ漸次雌伏し、長期弱少國家群を征服支配せる英國手法の取り得べきもの一切を學び取らんとしてゐるのであります。

祖國の愛國者諸君！　米國人は世界制覇の鍵は印度にあることを、よく知つてゐるのである。

ガンヂー翁は、翁の理想たる世界の自由は英國と米國の支配より印度が完全獨立することにより始めて實現せられるものであることをよく知つてゐるのであります。ガンヂー翁が諸君の中に在りて、自由、即ち印度の自由、世界の自由獲得爭鬪に翁自身の身を投じてゐる所以は此處に存するのであります。これ又諸君の祖先、先覺の理想なのであります。今猶諸君に深き崇敬、敬意を拂つてをる亞細亞他民族數億の祖先の理想であるのであります。而して世界は諸君の自由解放を通じて高貴、崇高なる生活

獲保と依つて以て、往時の如く世界の幸福に寄與せむことを期待してゐるのであります。

然し乍ら、私は諸君が今又、英米人ならぬ恐るべき敵と闘つてゐることをよく知つてをります。諸君は諸君の身中に恐るべき敵を持つてゐるのであります。而して此等の印度人達は諸君の眞中に愛國者、平和唱導者の假面を被り盛に蠢動してゐるのであります。

テーヂ　バハドゥウル　サプル卿、ヂャヤカール氏等の面々はマハトマ・ガンヂーの印度解放の努力を挫折せしめんとしつゝあるのであります。

サプルー、ヂャヤカール等を含む所謂三十五名の印度指導者達に依つて發表せられたる聲明、即ちガンヂー翁は目下英國と妥協策に就き協議中であるてふ聲明は、何を以て諸君は說明出來るでありませう、誠に唾棄すべきものではありませんか。

此等の印度人達は祖國を賣る裏切者であり、英國の代理を務める惡德漢共であります。

私は同胞諸君に心より御願ひする、例へ一瞬間たりとも此等の所謂指導者達を信じてはならない。

此等の惡德漢共の僞瞞に萬善の注意を拂つていたゞき度いのであります。

祖國の愛國者諸君、斯る故に私は身を低うして敢えて諸君に懇願するのであります。此の印度の重大危期、世界歷史の重大緊急時に、祖國に課せられたる諸君の義務を遂行し、凡ゆる犧牲を供する用意をせられ度いのであります。而してマハトマ・ガンヂー翁の理想印度の自由、自由印度を通じて自由にしてよりよき、よく幸福なる世界實現の一刻も早からむ樣、翁の理想完成に努力邁進せられ度いのであります。

自由目差す印度に榮光あれ

バンデー　マータラム

一つの國家――印度
一つの仇敵――英國

一つの目標――獨立

英國打倒　人類の敵英國を。

仁愛　全人類に

博愛、正道、正義、眞理。

恩顧、禮儀、優雅。

智識、理性、愼重。

信仰、信義、眞摯。

中庸、潔白、力。

團結、忠實、犧牲。

神を敬ひ、人を愛せ。

奇蹟的勝利

全世界の印度人は、印度に於ける英國支配暴壓に敢然抗議の行爲として自らに課したマハトマ・ガンヂーが三週間の斷食を成功裏に終了した報道をうけたとき、歡喜、感動した。

英國の壓制に對する世界の良心を喚起すべく、此の斷食を敢行せる時、彼は此の苛嘖を必らず成し遂げることを宣言したのである。

彼の非常なる高齡に、加之六ヶ月間に渉る牢獄生活に依て非常に健康を害ねて居つたのである。マハトマ・ガンヂーの行動は印度民衆並びに全世界に於ける彼の友人達にとり重大懸念の源泉であつたのである。而して彼を診斷せる醫師さへも、翁が生き得るや否やに關し非常なる疑がある旨を發表したのである。

然し遂に翁は生き長らへたのである。而も最も勝ち誇りたる姿に於いて。あの脆弱

なる體軀に潜む不撓不屈の異常なる精神的、並びに全能なる神の神聖なる慈悲に對し感謝せねばならぬのである。

余はマハトマ・ガンヂーの奇蹟的勝利と、過去三週間、印度に於ける英國勢力に翁の與へたる痛烈なる打擊、——印度民衆に對し正しき勝利のメッセイヂとして、且つは亦獨立獲得戰の勝利のメッセイヂとして、その痛烈さを思はざるを得ぬのである。

約七ケ月間、印度國民主義者は全國に亙つて英國に對し激烈なる抗戰を續けて居つたのである。

マハトマ・ガンヂーの理想の精神に忠實に、印度愛國者達は武器なき武器を以て、高尚なる鬪爭形式によつて抗爭し續けたのである。

印度は印度の心からなる敬神の念を以て英國の瀆神不敬に出會ふたのである、印度は眞實に依り英國の不眞に對し、印度は正直、質樸を以て英國の狡猾、邪智を迎へたのである、印度は勇氣と隱忍忍苦を以て英國の暴力、威嚇に對處したのである。

印度國民主義者は印度に於ける英國支配の基礎なる非道殘酷なる暴力を世界に曝露したのである

武裝せぬ印度は英國の組織的なる暴力に挑戰し、今尙ほ挑戰を繼續しつゝあるのである。

プーナに於ける英國牢獄の壁の後より、マハトマ・ガンヂーの心は、血に飢えたる英國の殺戮、非道なる攻略に救ひ手なき犧牲であり、掠奪の對照たる四億愛國の民のために、貴き翁の血を流したのである。

而して、二月十日、マハトマ翁は英國四人として、唯一の武器たる意志の力に依り、英國の野蠻性に斷乎たる抗議をしたのである。

印度並びに世界の人々がマハトマ・ガンヂーの容態の報道を懸念焦慮しつゝ、刻々時間、日を不安に數へて居る間、冷血英國は恰も何事もなきかの如く、些かも動く氣配を見せなかつたのである。

凡ゆる印度人、世界の多くの人々がガンヂーの延命を希ひ、祈つてをる間に、無情冷淡なる英國はガンヂーの死を希望し祈つたのである。

全世界正義の士はマハトマ・ガンヂー並びに印度問題に多大の同情を寄せて居るに反し、憎むべき英國はマハトマ・ガンヂー殺害の理由を作り、引いては、マハトマ派一派殺害、及び印度國民會議派消滅に依り印度國民主義崩壊を企圖しつゝあつたのである。

英國總督はマハトマ・ガンヂー釋放の印度國民要求を、非常なる侮蔑を以て突撥ねたのである。總督は曾て最も不遠慮無禮なる態度を以て利用したる三名の彼にとつて有力なる印度人が、ガンヂー翁の貴重なる生命を救助せむと總督に迫つた際、彼は此等印度人を解雇する迄の暴擧に出でたのである。

然し乍ら、ガンヂー翁は遂に斷食を無事完了したのである。而して英國總督並びに印度に罪科を重ねる彼の共犯者はひどく失望したのである。

マハトマ・ガンヂーの斷食より勝利の再起は唯にガンヂーをしてよく堪えしめたる精神力の勝利のみならず、印度の勝利であり、且つ亦正義、正道の印度獨立問題の勝利である。

この勝利は、今や正に危急に頻する英國帝國主義の兇惡勢力に對する更に大なる勝利を印度民衆に確信せしめるに役立つであらう。

又マハトマ・ガンヂー生涯の使命を完成せしめる崇高なる犧牲を供すべく印度國民に拍車をかけるものである。

余はマハトマ・ガンヂー斷食成功完了の今日を以て印度獨立獲得戰の勝利の進歩を示す重要なる里程標として考へたいのである。我等の尊敬するマハトマ・ガンヂーが印度の敵に對し勝利の記錄を彫刻したる今日の此の重大有意義の日に當り、印度民衆が漸く愁眉を開いた。あの危險な時に示された印度の友人達の御深切なる御芳志に對し、余は深甚なる感謝の意を表する者である。

共同の敵アングロアメリカに對する印度國民爭鬪を支援される有力なる樞軸國並びにその同盟國に對し、印度國內及國外に居る印度人の心からなる感謝を捧げる次第である。

殊に印度獨立戰に全面的援助を誓約したる大日本帝國國民各位に、余は東亞在住印

度人を代表し衷心より感謝を捧げ、且つ日本政府並びに無敵日本軍に對する全印度人滿腔の感謝を示するものである。而して此の機會に全亜細亞地域よりアングロ・アメリカ勢力全滅の日迄、日本の兄弟と共々飽く迄戰ふ印度人の決意を新たにし、且つ鞏固にするものである。

印度の試練、艱難の過去三週間、不安、懸念の時は過ぎ去つたのである。

日本政府並びに國民の信ずべき代表者に依つて示されたる印度に對する同情の言葉、援助保證等は印度民衆にとり甚大なる喜悅、激勵の泉であつたのである。

仇敵は苦惱す

印度の仇敵英國に對するガンヂー勝利の此の日、余は祖國内及び祖國外に在る我が同胞愛國者諸君に勸告するところがあつた。——即ち印度獨立戰此の最後の爭鬪に全面的に、速かに投ぜよ、而して我等の崇敬する指導者マハトマ・ガンヂー生涯の使命を獲得せよと。

諸君に對し更に强調せむ、神の下し給ふ善き酬ひは我等の上にありと。

印度に於ける英國は今や深刻なる敗北を喫し苦惱しつゝあり、而して印度國民は仇敵英國に對し精神的大勝利を博したのである。

今こそ彼等に最後の一擊を與ふべき絶好の機會である。

斷乎結束せよ、我等自身を信じ合へ、而して我等至高の犧牲を捧ぐべく用意せよ。

それ即ちガンヂー翁の印度へ送る使命である、これこそガンヂー翁が翁自身の貴き生命を犧牲に供したる使命の所以である。

苟も印度人たる者一人たりともマハトマ・ガンヂーの聲に答へよ。

總ての印度人、軍人、官吏、勞働者、農民、凡ゆる印度人は起て、打倒英國のため總てを起たしめよ、而してマハトマ・ガンヂーを殺害し、印度國民を潰滅せんと企てたる惡魔英國の最後の足跡を速かに消却せしめよ。

全能なる神は印度が自由にならねばならぬことを意志し給へり。而して全能なる神

はマハトマ・ガンヂーは生長らへ、自由印度を指導すべきことを意志し給へり。

五、東亞全印度人大會とその反響

アーザッド　ヒンドゥ紙（自由印度紙）の昭和十八年七月五日（月曜日）に東亞全印度人大會を次の如く報道してゐる。

ラス・ビハリー・ボース氏印度獨立聯盟最高顧問に推さる。

而してスバス・チャンドラ・ボース氏、ラス・ビハリー・ボース氏に感謝しその業績を稱揚す。

尙ほ昭和十八年七月四日、昭南市に開催されたる東亞在住全印度人歴史的大會に於いて、ラス・ビハリー・ボース氏は東亞印度獨立聯盟總裁の地位をスバス・チャンドラボース氏に移讓す。チャンドラ・ボース氏は此の地位を受け、ラス・ビハリー・ボース氏を同聯盟最高顧問たることを懇請し、次の如く挨拶す。

大會開會

此處に御挨拶を申上ぐるに當り、先づ私は、私自身として且つ全印度人を代表してラス・ビハリー・ボース氏に對し深甚なる感謝を捧ぐるものであります。

萬堂の諸君は今次戰爭勃發以來、同氏の祖國印度に對して果たされたる功績の如何に顯著なるかをよく御存知の處であります。

私は同氏の活躍せられたる三大要點に就き說明申上げます。

前大戰前後相當の期間、印度に於ける凡ての人は祖國解放に對する同氏の活躍振りを非常によく知つてをつたのであります。然し乍ら現在の若き人々は遺憾乍ら忘れて終つてをるのであります。

印度解放の前爭鬪に於いて同氏が身命を非常なる危險に曝し敢然戰つたその驚ろくべき功は今尙我等の記憶に新たでありますが、一方英國帝國主義者達に深刻に錄されてゐる處であります。

斯るが故に、その後氏は祖國を後にせざるを得ぬの餘儀なきに至り日本へ行つたのであります。

日本に遁れた氏は尙も印度解放のために專心活躍を續けたのであります。

若し諸君の或者が、印度國外にあつた氏が、印度の爲めに一體何を仕得たかと問ふ者あらば、私は確信を以て、同氏の果されたこと總てを知つてゐると答へるのであります。

先づ第一に氏は、印度獨立問題を有名ならしめたのであります。

同胞の多くの者、又印度國內に居る我等の指導者の內の多數にも、現在、印度解放のため印度國外に於ける宣傳が何を成し得るやを知らぬものも未だ少しとしないのであります。

彼等に對して私は常に、母國印度解放のため國外よりの援助獲得の必須を强調し續けて來たのであります。

我等の目的完遂の爲めには宣傳は絕對必要不可缺であります。

歐洲に於いて私が樞軸列强の同情を獲得致しましたことは、宣傳の力に依つたのではなかつたでありませうか。

日本並びに東亞に於いて是と同樣乃至是以上の効を擧げましたのは唯にラス・ビハリー・ボース氏に外ならぬのであります。

私は遂先般迄同氏に唯一度の面識も持たなかつたのであります、が私並びに諸君の凡ても眼前に明らかに見てをります處の、日本の好意、同情の一切は皆悉く同氏の眞摯なる努力に依つて得たものであります。

東亞に於ける凡ゆる有効なる力の隱には印度自由のために盡粹した同氏の二十五ケ年の並々ならぬ勞苦がひそんでゐるのであります。

今日、我々は同氏の勞苦の大成果を眞の當り見てゐるのであります。

第三番目の重要なる點は、氏が高齡なるにも不拘、大東亞戰勃發以來氏の重大運動指導の重大責務を負ふて來たことであり、これは我々にとつて誠に幸運事であつたのであります。

同氏の果し來つた數々の業績の中、これ等が主なる功績であります。

諸君は此等の業績の前には因て以て起るべき幾多尨大なる、恐るべき大困難事の惹起したことはよく御判りと存じます、然し、此等幾多の困難を敢然排除、ボース氏は印度をして今日の有利なる位置に置いたのであります。

同氏の成きれたる功に對し、私自身、並びに全印度人を代表して衷心より感謝を捧げ、併せて今後尙活躍を續け、我等を指導せられむことを切に御依賴申上げる次第であります。

且つ又ラス・ビハリー・ボース氏は我等の最高顧問として、此の重大運動に私を御導き下さることを喜んで御引受け下さることを切望申し上げます。

氏も亦、變らざる御熱誠を以て眞摯御指導下さることゝ確信する次第であります。

× × ×

スバス・ボース氏、戰へ、勝利へ諸君を導くであらう！

新總裁に幸あれ、予の東京トリの出席は勝利の豫言なり！

印度獨立聯盟會議上、ラス・ビハリー・ボースは熱誠を以て叫ぶ、

而して昭和十八年六月四日午前十時三十分、昭南市大東亞劇場に於いて開催の東亞印度獨立聯盟代表人會席上ラス・ビハリー・ボースは次の如く獅子吼す。

諸君、武裝せる勇士諸君！

昭南會議後斯くも早く、今日此處に諸君に相會するの機會を得ましたことは、私自身のみならず諸君にとつても實に此の上なき喜びであります。

變轉極りなき諸事、誠に目廻ぐるしき程に進展し母國印度に對する我等の聖業の大運動は四月末の會議以來實に素晴らしき足跡を印してゐるのであります。

今日我々は母國解放戰の最も活氣的、最も決定的態勢に入らんとしてゐるのであります。

私は確信致します、我々は今や正に勝利の入口に立つてゐるのであります。

歴史的の日

諸君、印度獨立運動の東亞に組織されて以來、今や一年有半の日時を經たのであります。

凡ゆる實際目的をトす最も記念すべき日、即ち一九四一年十二月八日こそ、大日本帝國が正義の劍の鞘を拔き放ち米英帝國主義を破壞し、亞細亞諸民族をその桎梏より解放せむと敢然立ち上つた日であります、且つ又此の歴史的十二月八日こそ印度獨立運動を今日の形に成した發端を記念すべき日であるのであります。

諸君は此の機會に、我等運動の經緯の說明、我々の努力、成功或は失敗の樣相を枚擧せよとは御期待されまいと思ひます。

諸君は我々がたゞ母國解放に對する眞摯なる熱誠以外何物も持たず此の運動を開始せることをよく御存知であります。

而して間もなく我々は、眞實な友人、有力なる同盟等我等の運動は有力なる勢力を

集結したのであります、諸君の努力並びに協力に感謝せねばなりません。且つ全東亞を通じ全印度人の愛國的熱情に感謝せねばなりません。

而して又我々が衷心より最大の感謝を捧げねばならぬのは、我等の日本の友人であり、日本政府であり、又東亞各地域に於ける軍當局、並びに一般日本國民各位に對してゞあります。

試錬と艱苦

諸君、武裝せる勇士諸君！

諸君がよく知つてをられる通り、我々各々は種々大なり、小なりの試錬と、艱苦を分け合つて來たのであります。

然し、印度獨立戰に對する諸君の斷乎たる決意、諸君の忍耐、眞摯なる義務觀念に感謝の意を表します、我等の運動は凡ゆる障害を越え、その本格的軌道に入り、增强されたる一大勢力、斷乎たる基礎は確立したのであります。

印度獨立聯盟は今日、全東亞組織即ち殆ど戰時體勢の一大組織に生長したのであります。

全東亞聯盟各支部の事業は各頗る圓滑に進捗し、我等の目下直面せる重大事項の完遂へ各々その職能を分擔、寄與しあつてをるのであります。

諸君、諸君並びに諸君の同志諸氏、且つ又全東亞の愛國者諸氏の不肖私に寄せられたる、絶大なる御支援、助力、御協力に對し私は衷心より感謝申上げる次第であります。

若し此等諸氏の絶大なる御支援、御協力なくんば果して、諸君の私に委ねられたる義務、責任は成し得たでありませうか。

諸君、私は已に諸君に對し、我等は今、印度獨立戰の新らしき段階に立つてゐると申上げました。

此處數十年間、印度は英國支配、英國開發の魔手と抗爭を續けて來てゐるのであります。

數千餘の印度愛國者は印度自由の爲めに貴き生命を捧げて來てをります、只今此の瞬間に於きましても、全印度は英國に抗爭してゐるのであります。

我等の崇敬する指導者マハトマ・ガンヂー翁は我等に强調したではありませんか、「こは最後を決すべき鬪爭である」と。

而して全能なる神の御助力により、此の鬪爭は必らずや、輝かしき印度の勝利を以て終結し、印度の仇敵アングロ・アメリカは慘めなる屈辱的敗北により世界より沒するでありませう。

有力なる同盟

諸君、試みに今日の世界情勢を瞥見せられるなら、私の言ふ意味を自解せられるでありませう。

印度國内に於いて、反英革命は既に十一ヶ月も續けられてゐるのであります。

英國は日ならずして此の革命を粉碎してしまふと豪語してゐたのであります。が彼等は失敗したではありませんか。而も彼等の鬪士達へ加へられた凡ゆる殘忍なる暴力、抑制にも不拘、慘めにも失敗に歸してゐるのであります。

印度國境外には我等東亞在住印度人は、國内印度國民主義者の努力を補足、援助すべく布陣待期してゐるのであります。

而して我等の支援者、印度の助力者として、有力なる盟約者なる日本人が後に控へてゐるのであります。

大日本帝國首相東條英機大將閣下がアングロアメリカ勢力擊滅の印度聖戰に對し、日本は全面的援助下さる誓約を再度强調致されましたのは、私が東京に居りました遂ひ先日のことであります。

而して諸君は、東條閣下が印度を援助し、印度をして完全獨立を獲得せしむる處に日本の政策の一ある點に就き決定的宣言を成したことを記憶してをるでありませう。

神與の機會

諸君、諸君は印度の勝利は確實なりと、私が確信する理由を既に了解されたでありませう。

尙私が屢々申述べました通り、善惡兩樣の奇蹟ありとすれば、その善酬は我等のため、即ち印度へ、惡酬は印度の敵米英へ必らず下るのであります。

今次の機會こそ正に天與の好機、我等の絶對逸す可らざる機會であります。

數十年間、印度は單獨に英國と戰つて來たのでありますが、今日は有力なる盟約國を持つてをります。

日本並びに歐洲に於ける樞軸國は、日本の友邦であり盟約國であります。

印度は今次の戰に於いては斯く有力なる友邦と共に戰つてゐるのであります。

樞軸國の勝利は印度の自由を意味し、アングロ・アメリカの勝利は未來數百年の奴隷印度を意味するものであります。

故に印度人としての我々の義務は誠に明瞭であります。

印度の自由の爲めに、世界の正義、道義のために、人間生活、交際のよりよき秩序のために、我等印度人は日本並びに樞軸國の勝利のために努力を捧げ、斷然戰はねばならぬのであります。

唯今、私が申述べました通り、日本並びに樞軸國の勝利は、印度の自由、四億の印度人の自由、亞細亞の光輝、世界新秩序の勝利を意味するのであります。

諸君、私が五月の末、東京に向け昭南を發つに當り、六週間前後經ば、再び戻り來るであらうと申述べました。而して今私は此處に立つてをるのであります。

私の不在中、本部實踐委員諸氏の最も有効なる御努力に對し深甚なる感謝の意を表し、且つ又私の歸來に當り熱誠なる諸君の御歡待に對し深く感謝の意を表する次第であります。

祖國印度のために

今日、此處に諸君に相會しましたが、私は一昨日東京より歸つて來たばかりであります。從て諸君は、私が東京に於いて見且つ聞き得ましたことに就き、私の報告を諸君は期待されてをることゝ思ひます。

私の日本滯留は誠に短い期間ではありましたが、私の見聞致しましたことは悉く感激おく能はざることのみであります。

私の最も感激に打たれましたる事實は、全日本國民の、上は首相閣下より下は路傍通行の一小市民に至る迄、印度問題に絶大の關心を持ち、偉大なる同情を寄せてをることであります。

印度の自由は凡ゆる方面に於いて關心を持たれ、激勵され、全日本國民は我等が敵米英を放逐し、完全獨立獲得せんとするに對し全面的に援助せむと用意してゐるのであります。

而して諸君自身が既によく御承知の通り、印度に於けるアングロ・アメリカを擊摧せんとする我等に對し、日本はその援助能力に絶對確信を有してゐるのであります。

日本の政策の眞實性に就いては、我々の眼前にビルマの歴史的大實例があるではありませんか。ビルマは目睫の間にあり、而してフィリッピンの獨立も亦、本年即ち日本皇紀二千六百三年中に自由國家として華々しく發足をするのであります。

唯一無二の機會

諸君、今次の機會は正に唯一無二の機會、即ち今後將來絶對再度なき絶好最大の機會であります。

我々は此の機會を絶對逸せず、母國を救ひ、二世紀の長きに渉り我等祖國四億の民の身心を蹂躙し盡した英國暴壓より同胞を救出さねばならぬのであります。

一方、萬一我等若し此の機會を逸し、母國に裏切らんか、我等は我等の四億の同胞のみならず未來の印度子孫をして永久に奴隷の塗炭の苦しみに陥入ればならぬのであ

ります。

今こそ我等の機會である、逸せば永劫に我等の手には來ぬ、今こそ印度自由の機會である、逸せんか未來永劫に自由は望み得ぬ機會であります。

諸君、武裝せる勇士諸君、恐らくは諸君は私が日本に於て見たことを猶話すことを期待されるでありませう。

然り、私は日本に於て、偉大にして有力なる日本國民が擧て勝利に對する斷乎たる決意を固めてゐる雄々しき姿を見て來たのであります。

諸君、私が今少し前に話したことをよく記憶して頂き度い、日本の勝利は印度の自由、印度の勝利、光輝を意味するのであります。

一致協力する日本人の姿

日本に於て私は、亞細亞の勝利のために武器製產に、有力なる大勢力が集結され大活動してゐる情況を見たのであります。

日本國民の一致協力、大決意の程は誠に恐るべきものであり、彼等の戰爭完遂への努力は正に絕頂にあるのであります。

各工場の活躍は夜に日に相繼ぎ、航空機に、戰車に、各種火器に將た亦彈藥に、最大能率を上げ目覺ましい活動をしてゐるのであります。

各種平和產業に從事してをつた處の巨大なる工場、製作所は今や悉く軍需工場であります。これは明らかに日本全工業が軍需工業であることを意味するものであります。

日本國民の全勞働は今や全く全戰時軍需勞働であります。

日本各地に於ける新船渠、造船所は戰艦を、商船は增强され無敵海軍へ、各種軍用船舶と陸續として造り出してゐるのであります。

將兵、航空士の猛訓練は全國各地に於いて行はれ、數百萬の若人は相繼いで軍に編入されてゐるのであります。

而して日本に於ける食糧問題は如何と申しますに、私は昨年食した食料と全く同一

のものを本年も相變らず易々と食してゐるのであります。

米、魚、肉、野菜等必要物資は豐富にあるのであります。一年有半の大戰は日本の食糧問題に些かの影響も與へてゐないのであります、日本に住む者、誠に卓越せる計畫、政府の統制に感謝せざるを得ないのであります。

一言を以て日本の姿を表現するならば、戰爭と勝利以外何物をも考へぬ一億一心と固く團結したる唯一人の日本人の姿を見るのみであります、勝利——自由解放の聖戰の勝利、勝利——印度並びに全亞細亞の自由と繁榮を意味する勝利のみであります。

一　東京より出席の意義

諸君、武裝せる勇士諸君、次に諸君は、私が東京に於いて我等の問題に對し何を成したか、又私が此處へ何を齎したかと尋ねるでありませう。

私が諸君の下に齎したものとそこれであります。（スバス氏の方へ向き直りつゝ）スリヂュート・スバス・チャンドラ・ボース氏は諸君にも、印度へも將た世界へも

今更紹介する必要は全くない人であります。

氏は印度青年層に於ける最善、最高尚、最も敬愛すべき又最も活動的なる最高、最上の一切を兼備せる男兒の象徵であります。

英國帝國主義に抗爭する全印度指導者として、氏は第一位に位するものであります。

同氏は赫々たる最高指導者であると共に絶對妥協せぬ斷乎たる鬪士であります。

氏は母國印度のために生涯を捧げてをります、「救世主スバス」の名こそ同氏に冠せられたる最も相應はしき呼稱であります。

十一度スバス氏は英國政治犯收容所に監禁されたのであります。然し乍らその十一度の苦惱、艱苦は最後の勝利の獲得される迄、自由のため斷乎戰ひ拔く不撓不屈の、鞏固なる意志を更に〳〵强化したのであります。

幸福なる一時

諸君、今こそ私の生涯を通じ、私にとつては最も幸福なる一と時であります。

私は印度自由の我等の闘爭に參畫する、我等の神聖なる母國特徴、特質を最も具備せる唯一人者を諸君の前に同伴したのであります。

東亞在住二百萬の印度人がスバス氏に捧げたる心からなる、熱狂的歡迎も同氏に對し、否私自身にとつても、又印度にとつても、猶十分とは云へぬのであります。

諸君、武裝せる勇士諸君、私は今日唯今、私の總裁たるの位置を退き、印度救世主スバス・チャンドラ・ボース氏を東亞印度獨立聯盟總裁に指命致します。

唯今より後、スバス・チャンドラ・ボース氏は諸君の總裁であり、印度獨立戰の指導者であります。

私は斷乎確信致します、氏の指導下諸君は戰へ、勝利へ敢然進軍することを。

而して、私自身は勿論、諸君の側に常に居り、此の聖戰に一切共歡共苦、以て勝利の榮冠を共に待つものであります。

生涯の使命

諸君は私が母國のために忍苦我が全生涯を母國に捧げたことは御判りになつたこと思ひます。

これが私の生涯の使命であります。

そして私の此の身體に息の通ふ限り、私が今迄さうであつた如く、今後も尙ほ母國印度の自由獲得戰の一兵士として闘ひ抜くことを誓ふのであります。

而して私は勿論、私が成し、與へうる一切を絶對惜しみません。我等の目前に迫るこの大爭闘に全幅の協力、支援助力、忠言、私の惜しむもの一毛だにないのであります。

諸君、勇士諸君、我等生涯の最大の好機は到來しました。

我等は今や我等の爭鬪の最も決定的重大時に居るのであります、我々は勝利の一歩前に立つてゐるのであります。

私には慈悲深き神の御手の我等の上に垂れ給ふのが見えるのであります。神の幸多き御手は我等の努力を形造り給ふのであります。

諸君、神に至誠なれ、諸君自身に至誠を致せ、我等の同志に、我等の盟約者に至誠忠實であれ、而して彼等の勝利は印度の勝利であることを確信せよ。

而して諸君、此の鬪爭に速かに參加する用意せよ、此の戰こそ我等の神聖母國を自由、勝利、光榮に導くのである。

革命、萬歳

印度救世主スバス氏に榮光あれ、自由印度！

ビルマの新誕生

我等の困難如何に多くとも必らず成功するのである。

「我々印度人にとつて、新ビルマ誕生は大なる希望と勇氣とを與へるものである。敵が日本こそ徒らに戰局擴大を盡してゐるてふ宣傳の虛構なることを日本はこゝに曝露したのである。

且つ亦日本の眞に求めてゐる處のものは、亞細亞の平和であり、繁榮なることを如實に證明したのである。現在行ひつゝある處の日本の戰爭は擴大擴張を目的とせざることが明らかにされたのである。

此の戰爭こそ實に、亞細亞人の亞細亞建設、即ちビルマ人のビルマ、印度人の印度建設の神聖十字軍の戰である。

ビルマは自由となり、印度が依然奴隷のまゝ留まつてゐていゝのであらうか。永久に自由になり得ないであらうか。

印度は印度危急の助けとなすべく多くの印度人を國外に送り出してゐるのである。

彼等は祖國の呼聲に直ちに應へるであらう。事實、今日彼等は祖國の呼聲に欣然應

へつゝあるのである。

既に組織され、世界に公然宣言されたる印度國民軍は、我等の母國を救ひ自由の旗を永遠に掲ぐべく熱誠滿を持して待機してゐるのである。」

マハトマ・ガンヂー檢束一周年、英國の即時印度退去宣言の印度國民會議通過記念、並びにビルマの獨立宣言祝賀記念大會はダドー　クラマット公園に開催され、この席上東亞印度獨立聯盟最高顧問たる余（ボース）は以上を冒頭に參會大衆に向つて溢るゝ熱情を以て次の如く述べたのである。

ペナン印度獨立聯盟主催民衆示威運動は昨夜、ダドー　クラマット廣場に於いて驚ろくべき成功裡に開催されたのである。

此の大會は從來見ざる稀有のものである。即ちペナン印度獨立聯盟女子部に依つて組織されたる女子部員四百餘名の出席を見たからである。

尙此の外、タウン、タンヂョン　ブンガ、テロック　パハン、スンゲイ　ニボン、バーヤン　レーパス等より來集せる訓練部員二千有餘名の參加も見たのである。

午後四時四十五分、豫定の如く正確に議事は開始せられたのである。

エヌ・ケイ・メノン博士立ち熱誠歡呼のうちに東亞印度獨立聯盟最高顧問たる余（ボース）を議長に推したのである。そこで、先づ議長の手に依り國旗揭揚、一分間の祈念を終へ、バンデー　マータラム齊唱の後ち、余は次の如く挨拶文を讀み上げたのである。

「印度が英國に戰を宣してより既に一年を經過したのである。英國ガマハトマ・ガンヂーを檢束投獄してより一ヶ年の月日が經つたのである。

而して我等は此等重大出來事の一周年を記念し此處に第一回の會合を開催したのである。

印度が宣戰布告せるは昨年八月八日である。

印度は既に半世紀餘に渉り英國と戰ひつゝあるのである、然し此の期間中、或る同胞等は英國の好意が遂には勝利を得るであらうと、內心喜び想像してゐたのである。

英國が英國の意志に依つては絕對に印度を放棄せず、印度を印度人の手に渡さぬで

あらうことを一般に認識せしむるに約半世紀を要したのである。

印度國民會議派實行委員會の昨年通過せしめたる英國の即時印度退去要求決議、即ち公然英國に對し印度退去を要求し、然らざる場合、印度國民主義の名の下に斷乎戰爭狀態に入る旨を宣言する迄には、我々は凡ゆる可能な手段方法を講じたのである。

印度並びに印度人の福祉を目的とす、と公言してゐる國家が、其後些かも印度退去の氣配なく、而も近代武器裝備の軍事的攻略による困苦、災禍より些かも印度救濟の手を用ひぬのである。

諸君の多くが知る如く、我々が印度・英國戰の開幕として英國へ印度退去要求案を國民會議に於いて通過して以來、既に數多の同胞愛國者が貴き犧牲を捧げてゐるのである。

英國統治下にある國に對する忠誠は罪惡である。

この罪は唯にマハトマ・ガンヂー、パンディット・ネール、マウラナ・アーザッド其他主指導者達に對してのみならず、既に牢獄に投ぜられたる數千の我等の同志に對

して犯すことになるのである。又同時に、我等の祖國が烈しき陳痛を經驗し再生する時、彼等は英國獄舍に呻吟せねばならなくなるのである。

勿論我等も知り、世界も知る、自由の價の非常に高價であることは、……而して我等は我々の自由を獲得する前に、此の高價なる代價を支拂ふ用意をせねばならぬのである。

斯の如き犧牲は既に絕對必須なのである。

國家が自由を獲得する時、又自由を維持するには凡て犧牲に依ることを、歷史は我等に物語つてゐるのである。

將來も亦、自由獲得の此の爭鬪の繼續される限り、祖國を救濟し、自由國民の厚誼の中に印度の正しき地位を確保するため、數千、數萬同胞の生靈を、自由の代價として支拂はねばならぬであらう。

祖國にある我等の兄弟、姉妹達は彼等の凡ゆる手段、方法を講じて英國帝國主義に抗戰し續けてゐるのである。

情熱溢るゝ愛國者、確乎たる革命家達は、彼等の眼の黑き間に、母國を外國壓制より解放せむと、言語に絶する艱難勞苦を蒙つてゐるのである。

然し此等の苦惱にも不拘、英國の桎梏より印度を自由にすることに成功しなかつたのである。

ガンヂー翁が本年二月あの異常なる斷食を決行せる時、全世界は翁の身を氣遣ひ不安、懸念の内に過したのであるが、英國政府は冷淡に全く無視して居たのである。

苦惱の武器、無抵抗の効果は敵の文明、文化の程度に匹敵する力があるのである。

未開の敵は、無暴力、無抵抗の戰鬪に對しては殆ど不感のまゝであるのである。

然し乍ら、一般的論法よりすれば、武裝なき國民は是れ以外何等の武器をも持たぬのである。

我等の困難、失望に不拘、英國は我等の士氣を些さかも破ることを得なかつたことは愉快にも驚ろくべきことである。

諸君は既に、今日に於いても、祖國の我等の兄弟、姉妹達が武器なく、何等の援助もなく如何に烈しき態度で英國帝國主義に抗し續けて來たかを知つてゐる筈である。

カルカッタよりマイソールへ、マドラスよりアーメダバッドへ等全國より來る報道の最近我々の許へ齎らされたる處によれば、ガンヂー翁檢束一周年記念日當日に於いてさへ、烈しき鬪魂を以て國境内に於いて鬪爭が繰り擴げられてゐたのである。

然しそれのみでは未だ不充分なのである。祖國外に居る總ての印度の嚴肅なる義務は、英國勢力、帝國主義の妨害に躊躇することなく斷乎國内同胞の救濟に赴くことである。

其れ故、現在我々にとつて最も重大なることは、一刻も速かに彼等の下へ赴く機會を捕へ、武力により彼等の活動を援助し、彼等拘束の絆より自由にすることである。

大東亞戰爭開始以來、日本並びにその樞軸國は我等を全面的に援助せむと誓約したのである。

今こそ神與の好機會である。

若し我等此の申出を完全利用に失敗せんか、疑もなく我等は我等の子孫より卑怯

者、罪人の汚辱を受くるであらう。

若し我等が之に依り動くことなくんば、結果に於いて敵に協力し、我等を永久に英國奴隷の位置に留むるを意味するのである。且つ亦數百萬同胞を幸福にし、自由にする最大好機の意義を蔑み、沈默せしむることになるのである。

印度の問題は唯だに印度のみの問題ではないのである、世界的問題なのである。

印度が自由を得ざる限り、世界は眞の平和、幸福を持ち得ないのである。

若し諸君が亞細亞並びに阿弗利加の地圖を眺むるなら、抑制壓迫を受けざる者の如何に小部分、少人數なるかに氣付くであらう。

斯く小人數の英人が、亞細亞、亞弗利加等の被征服者數千萬を支へんとすることの不合理なることは如何。

答は印度である。

英國の印度支配を通じ英國は地球上各地域の諸國を支配し得たのである。その基礎となつたものは、印度の人的資源であり、印度の經濟的資源、印度の軍事的位置等々を通じて英國は、狡猾なる英國は帝國を、英國帝國に太陽の沈む處なしと稱したる帝國を創造したのである。然し世界にとつて幸なる事には、その太陽は今や沈みつゝあるのである。

斯くの如く世界政策上印度の重大性は誠に明かである。印度が英國魔魚の桎梏より自由にならざる限り、眞の平和、人類の幸福は絶對あり得ないのである。

世界の種々なる難問題を解決するものは印度であり、印度の自由が世界の將來を決定するものなのである。

故に諸君、余がこれを單に印度のみの問題に非ずして世界の問題であり、廣く世界人類の問題なりと述べたる理由は此處にあるのである。

苟も印度人たる者一名たりとも、母國自由のために各自の最大、最善の努力を盡さねばならぬのである。

我等は二重の重大義務を果さねばならぬのである。

即ち其の一は、我々自身の母國印度のためである、我等は我等の祖國を自由に、偉

大にせねばならぬのである。

又他の一は世界の爲めである。

印度の獨立を通じ、我等は世界の人々をして桎梏を破り、奴隷的地位より解放せねばならぬのである。

ビルマの獨立

ビルマ獨立の宣言は人類進化の他の一里程標である。

我等印度人にとり眞摯なる喜悅である。我等祖國の隣國として又遂ひ先頃迄英國桎梏の下に喘ぐ共苦國として、ビルマは常に印度人の心に特別の位置を占めてゐたのである。

ビルマが自由を失へるは、英國の印度支配に餘りにも接近し居れるがためである。

ビルマは未開發天然資源を多分に藏し、殆どその大部は自然の儘の狀態にあつたのである。而して隣國に根を張る英國の貪恣、喝望を刺戟する總ての富を所有してゐたのである。斯るが故にビルマはその自由を失ふに至つたのである。

然し乍ら今次大戰のため、日本軍のビルマ進攻に依り、英國は永久に手離すまじと遮二無二ビルマに固執せむと足掻いたのである。

然し、幸にしてビルマの苦惱は一切終つたのである。

亞細亞よりアングロ・サクソン要素を一切追放し、獨立國家群に依る共榮圈確立を誓約せる日本は、英國を放逐しビルマを解放したのである。

歷史は未だ曾て斯る國民的仁愛、武士道的行爲を記錄した例がないのである。

これこそ眞に新しき精神である。征服、支配、開發に關係なき眞の精神、即ち自由、友情に對する眞摯なる精神である。

全印度人の義務

全東亞を通じ總ての印度人の義務は、我等の此の軍隊を有能、强力にすべく各自の最善を盡すことである。その數を增大し、その必要に備え、而して印度の自由獲得戰

の確固不拔の鞏固なる結合を作るにあるのである。

若きも老も、我等の一人々々が、否我等總てが我等の母國印度のために我等の血を流すことが我等の義務である。

其の答は誠に最善のものであつたのである、余はなほ數千數萬の同志が熱誠を以て、彼等の財産と同樣彼等の貴き生命を印度自由の祭壇に犧牲に供せむと來り集まる事を些かも疑はず、確信するものである。

若しビルマを模範とするなら、印度も亦亞細亞的精神のより大なる模範となりうるのである。

亞細亞は漸次、曾て亞細亞があつた如き光輝赫々たる時代に再び近付きつゝあるのである。而してその新らしき亞細亞に於ける印度の地位は曾ての如く最大なるものゝ一の地位を占めるであらう。

諸君印度人聽衆に對し、今更、印度が曾ては文明の燈火であつたことを指摘する必要はないであらう。

印度は曾で最も偉大なる政治家、美術家、外交家、最も偉大なる宗教指導者を生んでゐるのである。

今日の印度に於いてさへ、印度人のみならず世界の人々より尊敬を以て仰がるゝマハトマ・ガンヂーを出してゐるではないか。

印度は斯くの如く人類の教師であつたのである、印度は人類の幸福、繁榮を齎す自由を持立する同じ使命を遂行する指示性に缺けてゐるのではないのである。

一度自由とならば、印度は他の奴隷化されたる國民を解放すべく斷然鐵棒を執り立ち上るであらう。

現在缺けてをる處のものは、曾て過去に於いて作り出された如き文化が、此の亞細亞に創造されねばならぬ處の新文化である。而して其の新しき文化、文明の創造の中に、印度が果すべき大いなる役割が存するのである。

其の役割を果し得る時は、印度が自由になつた時、その時である。

是即ち、印度が最も早き好機に速かに自由にならねばならぬ附加的最大理由なのだ

ある。

亞細亞發展の進軍に、我等はおくれをとつてはならないのである。我等は印度を速かに自由にせねばならぬ、印度が自由になる時、亞細亞に根を張る英國牙城は一時に崩壞し、永久に失はれ全亞細亞は完全に解放されるのである。

自由亞細亞は新らしき文明、新らしき文化を創造し、世界を不幸、悲慘の境より救出するのである。

之に依つて明らかなる如く、印度の獨立は印度の獨立のみを意味するものでない理由である。世界人類の自由を意味するのである。

警告

終りに臨み、余は眞摯なる警告の鐘打をせむ。

我等が果たすべく着手したること、我等が成し遂げむと誓つたことは絶對小事に非ず。それは我等の死生の重大問題である、否我等のみならず我等同胞數百萬の死活を制するものである。

一人たりとも印度自由問題を輕視せしむる勿れ、小兒たりとも此の問題に輕舉盲動せしむる勿れ。

之れ全人類にとりても最も重大事の一である。印度人の持ちうる確固たる決意、鞏固なる意志、斷乎たる精神力のみが、我等の母國の自由、幸福を獲得し得るのである。

若し我等が團結、忠誠、犧牲の定義を確固把握せば、其は唯だ單なる定義ではないのである。

全世界に居る印度人が、唯一個のものである如く信ぜざる限り、彼等が彼等の力に完全に信條を置かぬ限り、又祖國の要求する如何なる犧牲にも應じ得ぬ限り、今我等が果たさむとする此の大事業は到底成し遂げ得ないのである。

若し我等が正しき精神を保持し、我等の行動を印度精神の上に基礎づけるなれば、我等の行く可き路が如何に困難であらうと、峻險なるとも我等は必らず成功するのである。

諸君、余は衷心より諸君に訴ふるのである。印度が公然英國に對し退去要求を突着けたる日を記念する此の日、亦、我等の友邦隣國ビルマの輝かしき獨立を祝賀記念する今日、諸君、頭を正しく高く上げ、鞏固なる心を持して我等の母國印度のために、諸君の全身心を捧げ、正しく盡忠を祖國に誓はれむことを懇願するのである。而して我等は共々に進軍し、我等の祖國ヒンドゥスタンの中心に我等の國旗三色旗を高々と立てやうではないか。

ガンヂー翁生誕記念

マハトマ・ガンヂー翁は「我が生涯最後の爭鬪、絶對妥協なし、最後への鬪爭、自由か然らずんば死」と叫んだのであるが、此れに對し余はガンヂー翁生誕記念日に當り、アーザットヒンドゥ紙（自由印度紙）の誕生記念特輯號（昭和十八年十月二日土曜日）へ次の如く掲揚したことを此の際御紹介申上げておきたい。即ち

「善酬は印度へ、惡酬は印度の敵へ、印度の自由は全能なる神の意志に適へるものなり、鬪爭へ、而して勝利へ」

ラス　ビハリ・ボース

而して余が記念日に際し東亞印度人に希望する所懷をアーザッド　ヒンドゥ紙へ更に筆を執つたところを次に繰返すであらう。

「今日はマハトマ・ガンヂー翁の生誕を記念する日であります、而して今日こそ印度國内、國外數百萬印度人のガンヂー　ヂャアンティ尊奉の最高潮を示す記念日であります。

マハトマ翁はプーナ在英國政治犯收容所に監禁されてをりますが、ガンヂー翁によりて點火された印度自由獲得なる翁の絶對拘束し得ぬ不滅の魂は印度全土、山間津々浦々に至る迄普く憤怒の業火となつて波及してをります。

而して印度國境外にある印度國民主義勢力は今や印度の敵英國に痛烈なる最後の一撃を加へ、母國印度を解放すべく萬善の準備を整へ滿を持してゐるのであります。

斯く今日のマハトマ・ガンヂー翁生誕記念日は勝利に對する確固たる希望、絶對信念結成の日であります。

如何となれば、印度は今日國家獨立の闘に立ち、マハトマ翁生涯の使命完成の瀬戸際に立つてゐるのであります。

マハトマ・ガンヂーは全世界より聖者として、英雄として崇められ、印度の逞しき爭闘の十四ヶ月間全印度國民はガンヂー翁の精神、即ち一致結合、忠誠、勇氣、犠牲の精神を身を以て如實に證明したのであります。

印度國民主義者は既にして、呪はれたる英國武力に敢然挑戦したのであります。彼等は英國の憎むべき爆彈、機關銃、火燃隊、等々に曝らされたのであります。

印度獨立の戦爭は千歳青史を飾る劃期的爭闘であり、未來永劫人々は大いなる誇を以て眺むるでありませう。

而して我々は今日、此の果敢なる劃期戦にある人々を衷心より稱揚するものであります。

この記念すべき日に當り、國内同胞諸君に送る私の書信は希望に充ちた明るいものゝ一つであります。

彼等同胞に斯く云ひ度い——諸君の勝利は諸君の身近かにある。

英國勢力は各所に於いて崩壊しつゝある。

太陽は英國帝國主義の上に沈みつゝあるのであります。而して印度の自由と獨立の曙は赫々と明け初めてゐるのであります。

マハトマ・ガンヂー翁生誕記念日の此の機に、私は此の書信を東亞在住同胞愛國者諸君に呈する次第であります。

印度獨立戦最後の情勢に於いて、諸君印度國外の自由印度人は正に最も活潑なる役割を演じねばならぬ時にあるのであります。

やがて諸君は戦場に立つでありませう。印度自由の聖業のために諸君の貴い生命を捧げる用意をせねばならぬのであります。

諸君は既によく知つてゐるでありませう。諸君の眼前にある此の大爭闘に、諸君は

友邦の鞏固なる支援と絶大無限の助力を持つてゐることを。

故に、マハトマ・ガンヂー翁誕生日を祝する諸君の最も適切なる道は　マハトマ　ガンヂー翁生涯の使命即ち印度完全獨立の聖業完遂を速かに而して輝やかしき勝利の中に終結せしむるため凡ゆる犧牲を捧ぐる諸君の決意を新たにすることであります。

マハトマ・ガンヂー翁は意義深き七十五回目の誕生日を傷ましくも英國犯獄のうちに迎へてゐるのであります。

「これは我が生涯最後の闘爭である」とはガンヂー翁が英國暴制の手にかゝり引かれ行く際に宣言し玄言葉であります。

出でゝ奴隷印度に生きむよりは寧ろ此の獄に死なむ、と翁は決意してゐるのであります。

ガンヂー翁最後の入獄なるや知れぬ此の機を正視し、勞苦を恥かしめぬことは全印度人の負ふべき聖なる義務であります。

而して私はその日の遠からぬことを確信してをります。

如何となれば英國暴政並びに印度内にある同類共に運命的痛撃を加へんと待期する祖國内外に固く結集したる印度國民主義の聯合一大勢力は今や各獄舍に殺到し、マハトマガンヂー翁並びに自由印度の貴重なる指導者を救ひ出さむと滿を持してゐるからであります。マハトマ　ガンヂー翁萬歳　自由印度　萬歳

六、蔣介石に與ふ

蔣介石よ、余は久しい間、率直に心底を打ち明けて、足下と語り合ふ機會を待ち望んでゐたが、東亞の全體が均しくここに歴史上決定的な新年を迎へるに當り圖らずも其機會を與へられることゝなつた。余は過去三十年間中華民國に對して深甚の關心を抱いてきた。余が中華民國の誕生せんとする苦難の時代に數年に亘り彼の偉大なる孫逸仙博士の知遇を得たことは余にとつて得難き幸運であつた。余は屢々この偉大なる

支那の指導者と印度の解放、印度國民に加へられつゝある災厄と悲哀に就いて親しく論じあひ、彼は印度の悲慘なる現實に常に滿腔の同情を示したのである。

偉大なる日本の愛國者頭山滿翁と余との親交も最初余を頭山翁に紹介した孫逸仙博士に負ふところ多大である。余の手許には孫逸仙の署名ある一の貴重なる書類が保存されてゐる。これは余が中華民國に對して申出た借款供與に關する取極めに關して孫逸仙博士が承諾を與へた書翰である。孫逸仙博士が常住力說し、又生涯を通じて其目的達成に努力した東亞の團結及び解放といふ大理想について考ふるとき、余は足下が此理想に逆行して戰ひを繼續し、且つは孫逸仙博士の業績の破滅のために矛をとりつゝある事實に思ひ至り言ひ現はし難い苦痛を感ずるのである。

余が足下に告ぐる所以はこの苦痛に發するに外ならぬ、何故なれば米英の侵畧に抗して東亞の解放に邁進する刻下の大規模な決戰において、いま足下ひとりのみが東亞の指導者から離れ去つてゐるからである、余は過去において正義と幸福の時代へと東亞を導き啓發した印度と支那の兩國は互に密接な關係にあり、その獨立は不可分のものであると信ずるが故に、また支那の獨立に對しては印度の獨立と同じく嚴肅且つ深甚の關心を有してゐる。

余は一世紀前中華民國を米英の壓迫と支配下においたものがインドに於ける自由の喪失であつたことを熟知してゐる。彼等が支那に注目し、インド產の阿片を武力を以て支那に押しつけることが出來たのは十九世紀に於ける侵略者英國の印度征服の後であつた。余はいま率直に足下は何のために戰つてゐるかを質問するであらう、足下は米英勢力の中華民族に對する支配と壓迫のために、或は中華民族の奴隸化のために戰つてゐるのか、米英の勝利は中華民國の滅亡とインドの終熄及び東亞諸國家の終りを意味するものに外ならない。

蔣介石足下、足下は米英側にあつて相次ぐ敗戰を挽回せんとする絕望的努力をなしつゝも、なほインド國民に英國と妥協すべきことを要請した。この事實は過去數世紀間多大の犧牲を忍び自由の獲得に一切を棒げつゝある印度に對する足下の無關心を示すものである。偉大なる中華民國の父孫逸仙博士は疾くに東亞の團結と一體性が東亞

解放への唯一の途であることを信じ二十年前、即ち一九二四年十月二十八日、神戸に於て次の如く斷言してゐる。

「若しも東亞民族が打つて一丸となり歐洲に對して共同戰線を結成するならば必ずや最後の勝利を得るであらう」

、今や彼の豫言は東亞において實現を見つゝある。足下の勢力下にある民衆を除き東亞全民族は結合され、共同の敵米英擊碎の戰ひを繼續してゐる、東亞民族は最後の勝利を戰ひとるであらう。而して東亞の指導者のひとりとして且つは孫逸仙博士の遺業を繼ぐものとして東亞民族と提携し、最後の勝利獲得に一歩を進めることこそ足下の義務と云ふべきである。

七、祖國の愛國者に告ぐ

祖國の愛國者諸君！　私は既に、祖國救濟の道は一にマハトマ・ガンヂー擁立推進以外にないことを充分申上げました。

事局は速かに轉變し、我々のうち如何なる者と雖も明日のことを知る由もありますまい。我々が實行せぬ限り、その潮時に、賢明に實行せぬ限り、我々は生涯悔ひを殘すでありませう。日々の逡巡は愈我々の身近かに危險を齎(もたら)すのみであります。

祖國解放の鬪爭に我々は一人殘らず悉くマハトマ・ガンヂーに絶對追從して行くことを翁に實證して頂きた度い。我等の愛する母國のために我々總ての者の差別を葬り去らうではありませんか。子孫の恨を買はぬやう今こそ一致團結、我等の自由を勝ち得やうではありませんか。

英國奸手を既に弄す

英國政廳はマハトマ・ガンヂー並びに有力指導者達の正當に選んだ道より偏避せしめんと凡ゆる奸策を弄してをります。

スタッフォード・クリップス、L・S・アメリーは共にマハトマ・ガンヂーに對して不服從運動を放棄せしめんと最も殘酷なる方法を以て威嚇してをります。此等英國政廳の代表者は印度並びに世界に對して、印度は自由解放の凡ての思案を一切放棄し、英國帝國主義者の敵に對する各戰線へ唯敢然參加すべきであると嘯いてゐるのであります。

英國は印度を彼等帝國主義戰爭に引入れんと必死の努力を續け國民會議を威嚇するに米國を利用するのみならず、印度の同情を振起せしむべく支那まで引合に出してゐるのであります。そして愚にもつかぬ大騒ぎが日支事變當時數多あつたことは既に世界衆知のことであります。

強いて申上げます。支那重慶に於ける蔣介石政廳は既に大支那の意志を代表するものではありません。蔣に對し同情を寄せたこともありましたが、今は彼の愚かさに唯哀れみを感ずるのみであります。

私は、彼が亞細亞民族の傳統的仇敵である米英帝國主義の單なる傀儡であることが明瞭に分りました。それ故に私は最早彼如き人物に對して些かも考慮を拂つてはをりません。

彼蔣介石は支那共和政の父なる故孫逸仙博士の信賴を全く裏切つた者であります。

私と孫文博士との個人的交際から、博士が亞細亞は英帝國の禍根を完全に排除せぬ限り、決して自由にならぬといふことを如何に固く信じてをられたかを私はよく知つてゐるのであります。孫博士の最大の弟子が英帝國主義者に全力を盡して協力し、印度民衆に印度の最大の仇敵に抗することを敢えて中止せしめんとするが如きは一大驚異ではありませんか。

狡猾なる宣傳

支那に於ける日本軍の活動が英國により印度に於ける反日感情煽動に非常に巧みに利用されてゐることは既に衆知の事實であります。

英國は自國の利益のために印度人の持つ目前の同情を完全に支那に向けてしまつたのであります。

然し乍ら、英國は嘗て日本が眞に支那に求めてゐることに就き正確に語つたことがあるでせうか。

印度民衆は未だ一度も日本が支那に對して些かも領土的希望を持たず、又日本の求めてゐる凡てのものは支那の友情であり、東亞に於ける米英支配を排除するに協力し、共存共榮の眞の亞細亞圏を確立することであることを聽かされたことはないのであります。日本の眞の意向を明らかに理解するならば此の自殺的爭鬪を中止するに、今でも決して遲過ぎることはないのであります。而して、私は此處で敢えて斷言致します。即ち若し印度が日本の眞意を知ることが許されるなら、印度の支那事變に對する態度は全く異つたものになるのであります。日本を惡魔の權化として糊塗せんとする英國の最も執拗なる政策は驚くべき努力を以て續けられました。

故に我等祖國の愛國者のうちには此の惡質なる英國宣傳に禍されてゐる者のあることを私は寧ろ當然と思ひます。そして私が今迄屢々申述べました通り、我々印度人は長期に渉る英國支配下の辛い經驗より、眞に有力なる國民、眞の帝國あり、而もその帝國は英國帝國の文字の當らざる帝國の存在を見極める能力を失はしめられたのであります。

然し、今や正に印度は斯る眞の國民、日本がその帝國なることを眞實に自覺せむとする時が來たのである。

日本の保證

日本は繰返へし、明瞭に、日本は印度攻略に關する意向些かもなし、と我々に確言

してをります。

然し、又日本は若し印度に侵入の危險ありとすれば、それは米英勢力の存在並びに印度に於ける米英軍基地に基因するに外ならぬと明言してをります。

而して、若し印度人が印度より米英勢力を根底より排除するなら日本は決して印度問題に干渉はしないのであります。

これこそ日本の最も眞摯なる政策の聲明であり、日本の唯一の目的が亞細亞よりアングロアメリカ勢力を破碎するのみであることを我々は充分に承服してをります。

我々が此の重大問題に些かの疑念をも持してゐない理由は、來るべき戰に祖國にをる諸君の要求する如何なる務めにも我々は立所に應じうる萬善の用意が出來てゐるからであります。我々は我々生誕の地印度を解放し、又防衛するに滿を持して參加を期待してをります。

若し未だ不幸にして印度國内の愛國者中、我々を信ずることを得ず、且つ赤誠なる日本政策を正視し得ぬ者ありとすれば、私は祖國永遠のため衷心より悲しむ者であります。

若し斯る同志のありてこの結果依つて以て來る可き災禍を悟り得ず、マハトマ・ガンヂー指導下のこの獨立最後の聖戰に直ちに立つて戰はざるならば、私の痛恨是より大なるはないのであります。

眞摯なる愬へ

私は私の赤心を吐露して眞摯に諸君に話してゐるのであります、若し私が印度太歴史中、此の最も重大なる時局に當り私が諸君に、私が赤心を吐露せざるとせば私は印度人として萬死に値する罪科を敢えて犯すことになるのであります。

私の申述べる言葉中、諸君の或者にとつては、或は充分滿足を得ないものがあるでありませう。然し、私は印度自由のため身を挺して盡くすことを生涯唯一の希望としてをる者に耳傾けて下さらんことを敢えて懇願いたします。

現時下こそ印度最後の運命を決する重大時であります。苟も印度人たる者一人と雖

も米英武力の蔭に印度は安全なりと思考すること勿れ。苟も印度人たる者米英武力援助により日本を阻止せむ等と斷じて思意せしむる勿れ。若し不幸にして印度が英米勢力を援助、日本の敵に組して協力を繼續するなら怖るべき災害を印度に招くものであり、祖國の數千萬の無辜の住民を測り知れぬ苦惱に曝すことになるでありませう。

印度民衆の名に於て日本の敵に組する心ありとすれば、日本をして祖國印度に對する無限の挑戰であり且つ日本進攻の機を故意に畫すると等しいのであります。

意外なる話

扨て此處に、英國が印度その他諸地域に撒布した處のマライ、ビルマに於ける日本の殘酷さてふ揑造の空語があります。日本兵は世界中で最もよく訓練されたものであるといふ私の言葉を信じて頂き度い。日本軍教典は兵に、敵に對しては飽く迄猛烈果敢に、友に對しては最も深切に思ひやりあれと敎へてゐるのであります。

日本軍のマライ攻略の際、印度兵は些か日本軍に抗戰致しました。然も此の時印度兵の受けた取扱ひは如何でしたらう。……捕虜としてではありません。友邦の民として取扱はれたのであります。日本軍占領地域内に於ける印度人住民も亦この思ひ遣りある友邦の民としての取扱ひを受けてゐるのであります。

ビルマ、マライその他東亞各地在住印度人團隊の代表者が最近バンコックに會合致しました。此等代表者達は日本兵の一般住民に對する義俠的行爲に對して等しく全幅的證明を感得したのであります。

今日印度は一刻も忽せに出來ぬ重大時局の分岐點に立つてゐるのであります。日本軍がビルマを占領して既に數ヶ月經過してゐることを忘却してはなりません。日本軍隊は今や印度東方國境に待陣してゐるのであります。

日本の袖手する理由

我々は日本軍は未だ印度國境に居り印度の土地に足跡こそ印してゐないが、何時如何なる時に於ても直ちに行動を開始しうることを私は知つてゐます。我々は日本軍は

未だ印度前線にも入らず、又印度都市を爆撃せざるは、日本が力足らず斯く成し得ないのである等との考を瞬時たりとも持つては不可ないのであります。

神明に誓つて申上げます。日本軍は印度に於ける英國軍備を恐れてゐるのである等と夢信じないで頂き度い。日本軍は諸君の誰よりも、印度に於ける英國要害に關する非常に正確なる、詳細なる智識を持つてゐることを確言致します。

彼等は國境を越えるより容易に、印度國内に於ける不完全なる英國防壁を粉碎することが出來るのであります。然し、何故日本軍が袖手してゐるのでありませう、それは外ならぬ印度人自ら立上り、外敵勢力を追放し、日本の手を借りず自由印度建設に大なる希望を懸けてゐるからであります。

警告の言葉

諸君、私は聲を大にして諸君に警告することを躊躇致しません。我々は既に我等印度の歴史中最も重大なる段階に到達してをります。今若し一歩過らば、それは印度の

荒頽であります。

唯だ神のみ知る幾星霜の先迄再起出來ないのであります。故に私は叱聲以て諸君に告げる。若し諸君が英國に協力するならば印度は日本軍に攻略されるのみである。この災禍の大責任は一つに以て諸君の双肩にかゝつてゐるのである。私は重ねて諸君に告げる、今諸君が英國に組して爲す一切の事は、魚雷を受け正に沈み行く船に乗船することである。

我々は印度四億の民を斯る災禍に落し入れる何等の權利をも持つてゐないのであります。

マハトマ・ガンヂー翁の決斷は絶對正しいものであります。翁の計畫實行のみが印度をこの災害より救濟しうるのみであります。

我等の神聖なる母國の名に於て、私は祖國の全愛國者諸君に懇願致します。印度國民獨立のマハトマ・ガンヂーの旗印のもとに一致馳せ參じ、勝利に向つて堂々進軍せ

よと。

諸君、印度の光輝ある過去を想起し給へ、又今日の悲慘なる現狀と祖國を待つ輝かしき將來を思ひ給へ。

さあ、諸君、我等の忠誠を胸に、印度の運命を擔ふて俱々進まうではありませんか。後を振返り見ること勿れ、逡巡することなかれ、俱に行こう戰爭へ、勝利へ、完全獨立へ。

犧牲を覺悟せよ

祖國の愛國者諸君！　諸君は既に英國に宣戰を布告しました。而して英國は既に出血してをります。

我等の尊敬するマハトマ・ガンヂー、マウラナ・アブドウル、カラム・アーザッド、パンディット・ヂャワルルラル・ネール、その他多くの國民會議派第一線の人々は諸君の間より拉し去られました。私は全く感慨無量であります。

我等の指導者を拉し去つたことは、これが始めてではありません。英國は既に切羽詰つてゐるのであります。英國は諸君の精神を打碎くに如何なる兇手を使ふにも些かの躊躇をしないでありませう。英國は諸君の前に修羅場を展開するでありませう。然し、私は、諸君が既にそれを敢然突破する用意のあることをよく知つてをります。

會議派の檢束、投獄は全印度を通じて各地に行はれ、既に數千或は數萬の犧牲者が出てゐることでありませう。英國の走狗グキンダス羅卒、その他檢束隊が隨時隨所に放たれ諸君に五月蠅く付纏ふで居りませう。そこを諸君はやがて怖るべき苛酷、犧牲の道を通過せねばならぬでありませう。

我が同胞の男も女も、老ひも若きも、如何に多く無情なる英國警察官のために危害を加へられ、又祖國に陣取る敵軍の彈丸の犧牲になるや測り知れず誠に戰慄を覺ゆるのであります。英國が若し此の印度國民軍に破れんか、彼英國は印度より、大亞細亞より、歐洲より、否世界より足場を失ふことをよく知つてゐるのであります。

斯くして英國は沒落し、未來數世紀經るとも決して再起出來ぬでありませう。それ故に英國は最後の手として、鬼畜にも勝る最も惡逆非道なる行爲も敢えて行ふでありませう。彼等は殘忍なる奧の手に依り、諸君を威嚇し、諸君を脚下に組敷かんと希つてゐるのであります。

精神を失ふこと勿れ

諸君、例へ一瞬たりとも魂を失つては不可ない。

祖國のため一人殘らず英國に向つて立て。恐らくは英國及びその共犯者は兇暴なる力を以て暫時諸君に勝つであらう。然し、此の戰は諸君のみで戰つてゐるのではないことを記憶せよ！

母國の國境外には諸君を救援する絕對强力なる軍隊が集結してゐることを忘れてはならない。彼等は祖國內にある米英軍を破碎する萬善の用意を整へてゐるのである。而して些かの容赦なく米英を全滅するのである。自分が數日前に諸君に語つたことを記憶してゐるでありませう。英國の强制の下に餘儀なく劍を持たされた數萬の勇敢なる同胞は、今はその劍を以て祖國の爲に持ちかへてゐるのであります。彼等は諸君からの命令の言葉を待つてゐるのであります。

これに對し英國は唯暴力にのみ賴つて諸君を擊破せんとしてゐるのであります。

然し、印度にある英並びにその同盟國よ、汝等の暴力に答ふるに、なほ强力なる武力の備へあることを忘れるな。重ねて英國に警告を與へやう、此度こそは逃れられぬ、と。

英國は間もなく悲劇的過失を自覺するであらう。自分は單なる空大言を信ずる者ではない。英國は必らず自國の所業に對する高價なる報ひを發見するであらう。

自分は母國に起きる凡ての事件を細大漏さず凝視見守つてゐるのである。自分は祖國の獨立完遂の日迄一刻たりとも休息しないのである。

印度國民軍數萬の兵士のみならず亞細亞在住二百萬の印度人は祖國印度のために全財產も全生命も捧げたのである。勇敢なる彼等は印度に於ける英國を完全擊滅に諸君

に協力、若し事成らずんば全員玉碎するの決意を嚴肅に誓つたのであります。

そして此度破滅するものは英國也と彼等は確信してゐるのであります。

戰は印度國内のみに非ず

諸君、戰つてゐるのは印度國内の諸君のみではないことをも一言申上げます。英國の最も怖れてゐる處の强力なる樞軸國家軍が全幅の同情と支援を以て諸君の後に控えてゐるのであります。我々印度人が此の英國に對する戰鬪に此等列强の道義的支援を得てゐるといふ事實は、最後の勝利は我等の手にあり、と無限の勇氣を與へる激勵の源泉となるのであります。

諸君は印度に於ける英米軍の勇敢さに就いて餘りにも多く聞かされたことでありませう。印度基地より米英空軍爆擊隊が華々しく活動、戰果を擧げてゐる虛報を飽きる程に聞いてゐるでありませう。

又アキャブ、チンドウインその他ビルマにある日本軍基地に對して米英軍が多大の損害を與へたと聞いてゐるでありませう。英國は未だ、日本軍は印度基地に報復出來る程有力ではないと囁いてゐるのであります。

日本の優秀性

諸君、日本空軍の優秀性は全亞細亞に於ける英國の醜き而も打續く敗北を覆ふ唯一の辯疏であつたことを記憶されてゐるでありませう。ビルマにある日本空軍の僅か數時間の活動は何時でも印度にある米英軍基地を粉碎することが出來るのである。

諸君、私のこの言葉を疑つてはならない。然るに、日本は差控えてゐる。それは米英を恐れてゐるからではない、又彼等に慈悲を垂れてゐる譯でもないのであります。彼等は唯單に、印度に對する好意と思遣りから控えてゐるだけなのであります。日本軍は出來得べくんば印度に對して如何なる損害も與へまいと希望してゐるのであります。

請ふ、祖國の愛國者達よ、此の眞實を理解し感謝せよ。

又同時に、日本は今米英と交戰中なることを記憶され度い。日本は亞細亞に米英軍の一片麟だに發見せば直ちに擊摧するであらう。否立所に粉碎し得るのであります。

米英軍の印度國内に殘留する限り、我等の祖國より米英を掃蕩せむとする日本軍を思ひ留まらせることは絶對不可能であります。米英も此事をよく知つてゐるのである。然し彼等は印度に戰禍を引摺り込まんと決めてゐるのである。彼等米英の印度を徹退せざる理由は唯是あるのみなのであります。彼等は執拗に强行、而も印度をして彼等の運命を分擔せしめんと決めてゐるのであります。

諸君、再び私に云はしめよ、日本軍は何日何時にても印度を血醒き戰場と化すことが出來るのである。而も容易に勝利を得る日本軍得意の戰場である。然し、日本が未だ印度を攻擊に出でざるは避け得べくんば印度に災害を與へまいとする眞摯なる好意より最後の一瞬迄滿を持してゐるのであります。

賢明なる決斷

印度が英國の神聖ならざる戰爭に組し何等爲すべきものなし、と決斷したことは誠に賢明なことであります。而して一面英國に宣戰布告をし、完全獨立の戰端を開いたのであります。

マハトマ・ガンヂーが此の戰鬪遂行に關する詳細なる計畫を建てたことに私は疑を持つてをりません。

愛國者である諸君總てが此の戰鬪に於ける各重要なる役を持つてゐるのであります。我等の輝かしき祖國の運命は今や正にその岐路に立つてゐるのであります。我等國民の獨立は是が非でも暴英國より奪回せねばならぬのであります。

我々の國民的名譽は飽く迄擁護されねばならぬのであります。我々は最後迄この戰を鬪ひ拔き勝たねばならぬのであります。我々の飛込んだこの不均衡の鬪爭に、我等の仇敵英國は最も殺戮的近代武器を所有してゐます。

然し、諸君數百萬印度人にはマハトマ・ガンヂーによつて訓練された處の、彼等近代武器に匹敵する强力なる武器がある筈であります。而して、今こそその武器を用ふる秋が到來したのであります。

凡ての工場の勞務者諸君、男も女も、將又子供も英國のための武器、軍需品から手を離せ。凡ての運輸業者諸君、英國向き軍需品のハンドルの方向を變へよ。

凡ての印度兵諸君、マライ、ビルマ、リビア、エヂプトに於て英國に背を向けた諸君の同志の例に倣へ。而して隊を組んで印度國民軍に投じ、時こそ來らば諸君の手にあるその武器を執つて英國暴兇軍を迎へ擊つ用意せよ。

印度國內の住民諸君、英國、米國に對する全國的ボイコット陣を敷け。このボイコットにより、床屋も、洗濯屋も、料理人も、家僕も、掃除人も決定的態度を示せ。全印度一人殘らず神聖なる母國の危急存亡のこの秋、潔く立上れ。

自分の此の話を結ぶに當り、此の警鐘を聽いて頂き度い。即ち、印度は今や英國と交戰中なのである。マハトマ・ガンヂー並びに國民會議派に反對する者は何人と雖も印度の敵である。

直接と間接とを不問、未だ英國を支持する者は何人と雖も祖國を賣る裏切者である。印度に組せず、印度に違背する者は悉く印度の敵として取扱はれるのである。重ねて、祖國の同胞諸君に請ふ、印度自由の此の最後、最大の戰ひに對して全身命を捧げて投ぜよ。

諸君、我等の印度歷史中、最も重大なる時期が來たのである。神は正義に組す、勝算我に在り。全能なる神は印度の自由を思召してゐるのである。

印度は必らず自由になるのである。印度萬歲。

バンデー　マータラム